

記 録 中部大学国際関係学部シンポジウム

2007年度 国際関係学部シンポジウム

いま留学を問い直す—日本人が欧米で「学ぶ」ということ—

河合 秀和 長島 信弘 杓谷 茂樹
宗ティンティン 中山 紀子 野田 真里
伊藤 裕子 中野 智章

日 時：2007(平成19)年11月11日(土) 13:40～16:30

会 場：中部大学名古屋キャンパス(鶴舞校舎)6階大ホール

◇第一部 基調トーク

「我らが学問と留学—青春のオックスフォード—」

◇第二部 中国琵琶演奏と留学体験トーク

◇第三部 パネルディスカッション

「何が学べるのか? 何を学ぶべきか?—いま留学を問い直す—」

第一部

司会：杓谷茂樹(中部大学国際関係学部国際文化学科)

○司会 これより、国際関係学部シンポジウム「いま留学を問い直す—日本人が欧米で『学ぶ』ということ—」を開演いたします。

私は、本シンポジウムの企画・運営責任者で、総合司会を務めさせていただきます、国際文化学科の杓谷茂樹と申します。よろしくお願いいたします。

明治以来、多くの日本人が欧米諸国に留学し、最新の考え方や技術を学んできました。そしてそれらが長年繰り返されてきたなかで、欧米の考え方は充分に日本に導入されてきたと思います。例えば、私ども中部大学国際関係学部の教員が研究の基礎としているような学問はいずれもヨーロッパに起源があるわけです。欧米に留学した経験を持つ研究者にとっては、世代を問わず、こうした留学経験がその学問的形成に重要な役割を果たしてきたことは間違いないでしょう。そして、そうした研究者の背中を追いかけるように、多くの若い大学院生が次々と欧米の大学への留学を志しています。

しかし、グローバリゼーション、IT化が進む今日、留学の在り方も、そして留学すること自体の意味も変化してきているのではないのでしょうか。学問をめぐるさまざまな環境が変化していくなかで、彼ら若手研究者たちは、先人たちが獲得してきたほどの成果を留学経験の中から上げることができるのでしょうか。そこで、このシンポジウムを企画するにあたって、いま日本人があえて欧米の大学に留学することにはたして意味はあるのかと考え、ここで問い直すことにしたいと考えました。

さて、今回のシンポジウムは三部構成となっております。まず第一部では、ともに中部大学国際関係学部教授であります河合秀和と長島信弘が基調トークを行います。続く第二部では、同じく国際関係学部講師で中国琵琶奏者の宗ティンティン(Zong Ting Ting)が、自身の留学体験についてのトークを交えて中国琵

琶の演奏をいたします。そして第三部では、河合、長島両氏も参加するかたちで、国際関係学部の教員がパネルディスカッションを行います。

あらかじめお詫びしておきますと、出演者の皆さんとは十分な事前打ち合わせはしておりませんので、当初の私のもくろみとは違った話の展開を見ることになるかもしれません。しかし、それはそれとして流れに任せた方が、会場の皆様にとってはより面白い話になるのではないかと思います。そのようなスリリングな展開を期待してこの会を始めたいと思います。

それでは、さっそく第一部の基調トーク「我らが学問と留学 —青春のオックスフォード—」に入ることになります。出演者の河合、長島両氏につきましては、ともに日本を代表する国際政治学者、そして社会人類学者でありますので、ここであえて紹介するまでもないと思います。ただし、このお二人は、日本人が海外に渡航することが制限されていた時代に、選ばれてイギリスのオックスフォード大学に留学された方々であるということだけは申し添えておきたいと思います。河合さん、長島さん、どうぞよろしくお願いいたします。

■基調トーク 「我らが学問と留学 —青春のオックスフォード—」

河合秀和(中部大学国際関係学部国際文化学科)

長島信弘(中部大学国際関係学部国際文化学科)

○河合 河合でございます。「留学」という言葉について、明治時代の半ばに文部省が大変苦勞をしております。外国に滞留、つまり、「とどまって勉強をする」という意味なのでしょうが、しかし、「学を留める(学問をやめてしまう)」という意味もありまして、これはちょっと困る。世界を漫遊して学問をしてくるということで「遊学」という言葉も提案されましたが、これはこれで「学問を遊ぶ」という意味になる。何やかんやといろんな案が出された結果、最終的に「留学」という言葉に落ち着いたようです。

私も留学したときには、一時はとどめたり一時は遊んだり、いろいろなことをいたしました。今日、長島さんと一緒に私たちの小さな経験について語る前に、もう少し大きく目を開いて、日本人にとって、日本史全体にとって外国に勉強しに行くというのはどういう意味を持ったのかについて簡単に前置きしておきたいと思います。

五つばかりの波があったかと思います。一つは古代日本、6世紀から9世紀にかけての時期のことです。当時の日本は、天皇を中心とした国家を作ろうとしていました。そのためには、中国の進んだ法制度や道德思想(儒教と仏教)を取り入れる必要がありました。そこで朝廷が派遣したのが、遣隋使であり遣唐使であつたわけです。多くの留学生が中国に渡りました。それは、菅原道真が遣唐使の停止を建議するまで続きます。その間、日本が取り入れたのは中国の法制度や道德思想だけではありませんでした。字そのものも中国から取り入れます。ただし、その読み方は日本風にアレンジしました。それが漢字に他なりません。

さて、その菅原道真ですが、彼は漢詩にも長けていました。当時の日本の知識人にとって、漢詩に通じていることは教養として絶対に身につけておかねばならないことだったので、道真のその能力はずば抜けておりました。彼の作品は『菅家文草』や『菅家後集』で見ることができます。それは、中国の学者から見ても、けちのつけようがないほど優れた作品ばかりでした。中国では、各詩の節の一番最後のところで韻を踏まなければいけない約束になっているのですが、日本人はそれがあまり得意ではない。しかし、道真の詩には、そういう欠点が多くなかったのです。

ところが、道真は同時に、「東風吹かば匂いおこせよ梅の花 主なしとて春を忘るな」という歌で有名な和

歌の歌人でもありました。つまり、2ヶ国語で詩が書けたということです。これは学問の達成度を示しているかと思います。実際に外国語で詩を書くのは大変なことですから。

道真の建議が894年。それから100年後の1001年には、紫式部の『源氏物語』が出ております。これは、中国から取り入れた字の読み方をもとにさらにアレンジした平仮名で書かれておりました。そしてこれも中国では考えられないことですが、女性が書いている。しかも、小説というものを書いている。中国の儒教文化の中では女性は軽蔑され、小説は女や子どもが読むものと見なされていました。日本が中国から学びながらも独自の成熟した文化を作っていたことが、このことからわかるかと思います。日本が欧米だけでなく中国からも学んだということ、これは覚えておいていいかと思います。

次に、第二の波は天文12年、西暦で言うと1543年。ポルトガル人が種子島に漂着しまして、鉄砲と築城術、そしてキリスト教を日本に伝来するきっかけをつくった。この時期、日本からの留学は、伊達政宗が送ったローマへの使節―少年使節と言われていますが―ぐらいですが、しかし実際には、かなり多くの日本人が、例えばアンジロウがフィリピンでザビエルに会って、キリスト教でいう神、ゼウスをどう日本語に訳すかといった点について大変詳しい議論をしています。一介の漁師のアンジロウがどうしてこんなに教養を持っているのかとザビエルは感心しておりました。ともかく、このヨーロッパ伝来、これが日本のヨーロッパとの最初の接触ですが、これによって鉄砲と築城術が来る。鉄砲を使った信長が長篠の戦いで武田の軍団を打ち破る。安土に西洋風の天守閣を持った城を作るといったことは、皆さんがご承知のとおりです。

キリスト教はやがて排斥の対象になりました。1637年には島原の乱が起こって、キリスト教徒であることが犯罪であるということになり、この第二の開国、留学は非常に短く終わりますが、日本の文化に信長の政治業績が大きな意味を持ったこと、いまだにギヤマンなどのポルトガル語が残っていることにも示されていると思います。

次に、第三の波が、幕末から明治維新にかけて始まる日本の動きでありまして、ここで開国ということになり、そしてこれは朝鮮や中国とは違ったことですが、朝鮮や中国はやむなく開国をするのに、50年以上の非常に激しい戦いを続けますが、攘夷を唱えてできあがった明治政府は、明治5年には文明開化に極めて鮮やかに、変わり身早く転換を遂げました。

岩倉使節団という政府の職員、その半分がごっそり留学してしまうというような事態が起こります。この留学も大変成果があったと言っていいでしょう。外国の黒船や大砲が強い、これを学ばねばならないということから始まりましたが、その奥には、憲法や議会という、新しい社会と政治の仕組みがあるんだということが発見されて、日本はアジアの中でただ一つ憲法をつくり、議会をつくり、近代的な軍隊を作りました。そしてこれも、かなりの程度、世界に先駆けています。明治5年、1872年には初等教育令を出し、これはその当時、もっとも先進的なイギリスよりも2年遅れているだけです。こうして外国に学ぶということを見事にやってのけました。そしてその結果は、日清・日露戦争に勝ち、日英同盟によって第一次世界大戦に参加し、ベルサイユ講和会議では戦勝国5ヶ国のうちの1国ということになり、世界の一等国になったと言って日本人は喜びます。しかし、それから15年を経ますと、もう日本は外国から学ぶものは何もない。むしろ日本こそが、あらゆる知の発生源である。「八紘一宇」などということを唱えて、そして明治国家は自殺的な戦争にのめり込むことになります。

第四の留学は、言うまでもなく敗戦から始まりました。おそらくそれは、1990年ごろに終わったと言えましょう。経団連の指導者の一人が、「日本にはもはや外国から学ぶものは何もない」といった発言をしたことがありました。実際にその発言の翌月、不良債権が発見され、そしてサッチャーにまねて金融パンをやったら大変なことになり、そしてこれから外国との関係をどう立て直すか。いま「テロ対策特別措置法」、

インド洋でガソリンスタンドを経営するといったことについて国会でもめておりますが、新しい外国との関係の仕方を模索している。その門口にわれわれは立っている。

明治にも、これは大量の学者が、あるいは学生が出かけましたが、ここで話を限定しますと、明治6年、太政官令というのがありました。これから外国へ行って勉強しなければいけない。ついで、これはこの国と、日本は非常に限定的に目的ごとに行き先き国を定めています。例えば、陸軍はフランスへ行け、海軍はイギリスへ行け、ところがフランスが普仏戦争で負けると、ドイツに行け、土木・衛生はイギリスへ行け、医学はドイツへ行け、それから金融はどういうわけか、ベルギーとアメリカに行け、といったことを言っていますが、非常に選択的に、一つの国からすべてを学ぶというやり方はやらない。つまり、一つの国に依存、頼り切りにならないように行き先を分けております。同時に技術は学んでも、技術を生み出す土台になった文化は学ばないことになります。そのため、少しばかり学ぶと、小さな成功に満足し、自惚れて、戦争を始めてしまう。このような事情は、第二次大戦後には、アメリカに行くのが大はやりということになって、少しばかり変わってきているかと思えます。

大きな文明をつくり出した地域、ヨーロッパの古代、ギリシャ、ローマ、そして近代ヨーロッパ、あるいはインド、中国、そのような国々の古典を読みますと、すべて外国人がいる、外国文化があるということを経験的な前提にして成り立っております。ところが、日本の場合には、日本は本来あらゆる意味で、技術的にも思想的にも自給自足できるのであって、ただ時々欠点、弱点があるから学んでこなければいけない。ある程度学んだら、もう留学は止める。こういうパターンがあったように思います。

さて、そのようななかで、私が留学した小さな経験についてお話をしますが、私は国際関係論と政治学を東京大学で学びました。国際関係学というのは、まだアメリカから入ってきたばかりで、中部大学の国際関係学部をつくるときにも、私の京都大学の先生を通じてかかわったことがあります。

この政治学関係で申しますと、私の先生、丸山真男という先生で、ご承知の方もあるかもしれません。個人的には非常に長い付き合いがあり、指導を受けましたが、それから経済史、経済学においては大塚久雄教授。経済学そのものについては内田義彦さん。何人か戦後、われわれにとって指導的な立場に立たれた学者は留学しておりません。

国際関係が悪くなって留学の道が途絶えた。そのときに外国研究をうんと深めた。同時に、その外国研究が日本にとってどういう意味があるかということを経験して、そして丸山政治学とか、大塚史学と言われる学問が生まれる。戦後、日本の社会科学におけるルネサンスが始まるということになるのです。

つまり、外国に出る。出ると、そのときに外国と社会で、あるいは大学で、はやっているものを仕入れて、持って帰って、そしてそれを日本で小分けにして売って、そして一生学者としての暮らしを立てるというのが、日本における留学のやり方ですが、できなくなったときに、ものすごい馬力で、ものすごい深さで外国文化を見抜き、そして日本の文化を見抜いた。留学すればいいというものではないということを経験しておきたいと思えます。

私自身の経験を語ると、長島さんと私とは、イギリスのオックスフォードの同じ大学の同じカレッジにいましたが、私は昭和8年(1933年)の生まれで、1962年にイギリスに留学いたしました。そして、ブリティッシュ・カウンシル、英国文化振興会というのがありまして、これはイギリスの大使館の付属施設になっておりますが、このブリティッシュ・カウンシルそのものは1936年、ドイツとの国際関係が悪くなってきたことに対して、イギリスの外務省が、ドイツからの留学生をイギリスに受け入れる、イギリスの学生をドイツに留学させるということで始めたものです。

これは大変いい奨学金であります。私は幸いこの奨学金をもらうことができ、丸山先生は私の先生の先生、

私は孫弟子にあたるような関係にあります。私の直接の先生の福田歓一先生が、「おまえ、早く行け」と言われまして、大学院のときに、ドクターコースになってから留学の準備をいたしました。そしてブリティッシュ・カウンシルの応募資格が繰り下げられて28歳以上になっていましたが、その28歳になった月にちょうど募集がありまして、そして合格した。日本から10人ぐらい合格いたしましたが、一緒に行った人々は皆、教授・助教授、その道ですでにできあがった人々でした。

福田歓一先生は、あとで明治学院の学長になられた方ですが、その先生が言われるには、「もうおまえたちの年ごろの人間は東京大学に残れない。東京大学には戦争から帰ってきた若い人々が大学院に行き、あるいは特別研究生になり、助手になり、上が全部詰まっている。だから残れない。だから、おまえは先に早く留学しろ」と言われました。

これが非常によかった。というのは、偉い先生として行かなかった。学生として行った。これは大変に助かりました。そういう意味では、これからはだんだん外国へ行く人の年齢が若くなる。その一つの先駆けだったのではないかと思います。しかし、今から思えば大変古い話です。

留学は船。船でイギリスへ留学したのは私が最後であります。横浜港で皆に見送られて、イギリスのロンドンの港まで31日。途中、横浜を出てすぐに清水に入って、それから神戸へ行って、そして香港、シンガポール、ペナン、ボンベイ（ムンバイ）、いまのイエメン共和国のアーデンとか、スエズ、ポートサイド、そういうところに止まり、そして船をホテルの代わりにして街を走り回り、タクシーやバスで走り回って観光しました。

実際に1962年というのは、世界銀行の後進国開発資金の援助を受けて、日本で新幹線が通った年。日本はそのとき貧乏だったんです。世界銀行からお金を借りて新幹線をつくったわけですが、私の奨学金もイギリス政府のお金で、これは大変高額で、けっこうな奨学金でした。

しかし考えてみますと、そのとき日本にポストがないから早く留学しろと言われて、非常にうまく向こうで3年勉強させてもらいまして、むこうで大学院の学生から教師になりましたが、「ポストがあるから帰ってこい」。これは私が留学の成果を上げたというよりもむしろ、日本で大学産業が高度成長した、教師の数が足りなくなったからだだと思います。留学が非常に難しかったころ、そして非常にやりやすくなったころ、その変わり目のところに私はいたかと思っています。

実際に私が呼び戻されて学習院大学の助教授になったとき、月給は5万円でした。最初の年はボーナスがありませんでしたから、つまり12ヶ月で60万円。そしてそのとき、飛行機でヨーロッパを往復するのに60万円かかりました。だから帰ってきたときに、帰ってくる前もそうですが、もう二度とイギリスに留学できないんだと思ってました。

だから勉強して、これまでに見ることでできなかったジョン・ロックのプライベートペーパーズを見る。それで、これまでわからなかったことがわかって楽しい思いをしましたが、しかし、こういうものを勉強しているだけでいいのか。自分は何のために留学しているのか。貴重な時間、もう二度と持てそうにもないような留学の時間を本当に有効に使っているのかということ、何度も自分に問いかけた記憶があります。

1970年代に入りますと、ボーイング700型ができて、600人乗せる飛行機が飛ぶ。飛行機代がどんどん安くなる。だから私は、結局それからあと何度もイギリスに留学できるようになり、短期の滞在を含めると、向こうで教師の仕事をする長期の留学も二度ばかりありました。

私の話はここまでにして、長島さんにオックスフォードの話をしていただきましょう。私もまたあとで参加させていただきます。



○長島 長島です。

留学するということは、私の念頭にはまったくありませんでした。大学院に入ってから、アフリカ研究を始め、いつかアフリカへ行ってフィールドワークをしようと決めていました。京都大学は親分がいて、組織で文部省からお金を取って、学生を連れて行く。東京ではアフリカに関心を持つ先生はほとんどおらず、組織もありませんでした。

そこでアフリカ研究に関心のある東京都立大学と、東大の院生数名でアフリカ研究会を作り文献

研究で鍛えあいました。でも研究費という点でアフリカに行くチャンスがなく、5年間口惜しい日々を過ごしました。(この研究会から最初にアフリカに行ったのは山口昌男さんです。それよりずっと後に川田順造さん、私、阿部年晴さんが続きました。)

ところが私がドクターコースのときに国際基督教大学で非常勤助手になり、そのときの先生の一人に、ウィリアム・ニューウェルというニュージーランドの元空軍大佐という方がおりました。彼はオックスフォードで社会人類学を学んでいます。

ある日彼に「ノブヒロさん、ブリティッシュ・カウンシルの試験受けなさい」と言われました。そんな試験については河合さんと違って私はまったくノー準備だったのです。締め切りはいつですかと聞いたら、「昨日だ」と。もう落語みたい。

そうなれば、ぶつつけ本番出たとこ勝負です。5回試験があるんですよね。決勝まで残れるか。だいたいそれまで人類学で受けた人たちは書類選考で落ちていましたから。

書類選考のほうは何とかバックアップしてくれる人がいたので通って、あとは実力でやれと言われた。通ってしまったのです。私は最後の決勝の面接では、もう間違いなく落ちたと思い、試験場の英国大使館から中山競馬場へ直行して、思い切り遊んできちゃった。

ちょうどそのころ、私はオックスフォードの社会人類学者ゴドフリー・リーンハートの本 *Social Anthropology* を翻訳していました。そのリーンハート博士に、今度イギリスへ行くことになったと書いたら、「じゃあ、オックスフォードへ来い」という返事が来ました。

ブリティッシュ・カウンシルというのは、オックスフォードや有名大学はあまり行かせたくないんですよ。なるべく分散したい。本当に私の場合、偶然も偶然で行きました。もうそこは偶然だらけなんですよ。

ただ、先進国へ行って勉強をするのではなくて、私はアフリカへ行って、自分の研究をしたかった。しかし、アフリカ研究をやっているイギリスの社会人類学、特にオックスフォードの人たちのすごい業績がいっぱいありました。私は書物を通じて知っていたけれども、まさか自分が行くことになるとは、8ヶ月前までわからなかったのですね。

なんののかのと3年勉強しました。2年目からは B.Litt という課程に進みました。マスターコース相当と言われますが、日本のマスターよりはちょっと格上なんです。指導教師もそれまでのロドニー・ニードム先生から美人のアフリカ研究者ジーン・バクストン先生に変わり、懇切丁寧な個人指導を受けました。ウガンダのイテソという民族の歴史と社会について500枚ほどの論文を書きました。けれども利用した文献はどれも浅薄なもので、嘘だろうと思ったりして、私は自分の書いた論文に納得できませんでした。それでバクストン先生に「論文は出さず、自分で調査してきます」と言ったら、激励してくれました。

ブリティッシュ・カウンシルは、帰りの飛行機代をくれるんです。だから、ウガンダ経由で東京へ帰りたい、差額は出しますと言ったら、「そんなのは、だめ」と断られました。でも私は、アフリカに行かなきゃ何のために来ているのかわからないでしょう。だから片道切符で行きました。金がなかったですよ。イテソ人に食事たかったりして。

このように、オックスフォードでの3年間の勉強というのは、要するに個人教授なんです。ニーダム先生はべつにアフリカ研究者ではない。ものの考え方、理屈の付け方、議論の仕方を徹底的に鍛えられるのです。だから、私はすっかりへ理屈の鬼になって、嫌われているんです。ああ言えばこう言う。ついには相手の議論の立て方によってこっちも変わるわけです。アフリカのダンスにもそういう身体的掛け合いがあり、ちょっと似ている感じがあります。

2年前に、オックスフォード人類学100年祭というのがありまして、私も行きました。そこで、オックスフォードに留学した人類学をやっている日本人が何人が集まっていました。既に学位を取った人も現在留学中の人もいました。私はその人たちを集めて自分の経験と彼ら・彼女らの経験を照らし合わせてみました。私の経験は42年前ですからね、古い古い話。そうしたら、大学もずいぶん変わったし、制度も変わったし、サッチャーの大学改革以来、コモンウェルス以外の国の留学生の授業料がべらぼうに高くなったけれども、個人教授、チュートリアルのごさだけはまったく同じだと皆が言っていました。

きついんですよ、チュートリアルは。どんとテーマを与えられて、自分で考えなきゃいけない。考えるといったって、何を考えていいかわからないことだらけで苦しむという状況は続いているようでした。

ただ一つ、非常に違うなと思ったのは、現在オックスフォードに留学している日本人、女性が多いのですけれども、ほとんどが日本研究をしている。これは植民地型ですね。

昔、ケニアの初代大統領のジョモ・ケニヤッタ、ロンドン大学で人類学を学び、自分の所属するキクユ民族の研究で博士学位を取りました。これは日本語にも訳されています。『ケニア山に向かいて』です。自文化の研究は易しいわけではないけれど他文化研究よりは言語的に楽です。先生にとっては、搾取とまでは言いませんがより緻密な資料が得られるという得な点があります。でも学生から見ると自文化を他文化として見る訓練にはなりますが他文化との直接対決という機会を奪われているとも言えます。

最初は私しかいませんでしたが、後に人類学でオックスフォードに行った日本人学生も1990年代初めまでは非日本研究者が多かったのです。オセアニアとか、スコットランドへ行くとか、そういうイギリスをステップにして、日本以外のところでフィールドワークをするのがパターンでした。これだと経験の三角関係ができます。

その三角関係をもう一度言いますと、私がアフリカ研究を始めて、例えば外務省の人などに会うと、「アフリカから何か学べることがありますか」とバカにされる。先ほど河合さんの言われた、何かを学ぼうという精神とはあべこべに、学ぶことのないところに行って、何をするんですかと言うことです。あなたに会っているよりましだと言ったこともありますけれど。民族を序列化して考えるという悪い癖も三角運動で是正できるのでないでしょうか。

私にとって留学というのは、アフリカに行けないからたまたま発生した人生のおまけみたいな物ですが、とっても良いおまけでした。そういう意味では、私がやっている人類学では、留学していない人が非常に多いです。フィールドと日本の往復です。それやっぱいいったん欧米で暮らして、三角関係をつくったほうが私はいいと思います。

私の先生の一人に、東大最初の女性教授、中根千枝という人がいました。この人は自分がフィールドワークをやってからロンドン大学に行った。それはいいですよ、そういうことができたなら。スウェーデンあた

りから研究助成でいっぱいお金をもらって行っているわけです。こちらは文無しですから、フィールドワークしてから留学しなさい、いま留学はだめよ、なんて言われてもね。

河合さんは不思議な人ですよ。学生で行って、向こうで先生になってしまった。こういうのは変身というのか、出世というのかよくわかりませんが。私はもちろん学生のままです。イギリスの持っているオープンな身分制というのがありますね。学生と先生では身分が違うのです。1等客室と2等客室以上に違うでしょう。それとメンバーシップにうるさい。大学にコモンルームという談話室が有りシニアコモンルームとジュニアコモンルームの別があり、客員研究者でもシニアのメンバーでなければシニアの方には入れません。ここに当然のように黙って入ってつまみ出された日本の教授を私二人ほど知っています。それからジュニアコモンルーム、学生談話室ですね。新聞があってお酒があって。これは付けて飲みます。そういう身分差格差というのが非常に厳しい。それからハイテーブル。河合さん、そこで食べたんでしょう。

○河合 うん。

○長島 食堂があるじゃないですか。ちょうど『ハリーポッター』に出てくる食堂、あんな感じです。ここにちょっと高いところがあって、先生方はそこで食べるんですよ。下から見て「あ、ちきしょう。うまそうなワイン飲んでいるな」とね。

それがのちに、ウガンダのマケレレ大学へ行くと、やっぱりハイテーブルがありました。植民地というのは、本国と同じシステムが持ち込まれたんだということがよくわかりました。

それでね、河合さん。学生だったときと先生になったときと、何が一番大きな違いですか。

○河合 いろいろ違いまして、食事を下でやるか上でやるか。ハイテーブル。ハイテーブルというのは、オックスフォード大学のフェロー、スペイン語を使っていて「ドン」と言いますね。

○長島 ドンと言いますね。

○河合 世間ではあまり知られてなくて、ドンというのはハイテーブルで食べるらしくて、どんなものを食べるのときかれたから、私はパブで知り合った街の人に、赤ん坊の丸焼きでもなんでも食うんだ、ウオッカとかワインで流し込むんだとか、そういうでたらめ放題のことを言いました。

長島さんがお話になったこととの関連で、特に私が今日お話ししようと思っていたのは、オックスフォード大学の教育方法です。基本的にチュートリアル。チューターというのは家庭教師という意味ですが、教師一人と学生一人が差して授業を受けるというのが基本になっているのです。

学生は、広く歴史とか文化とかという自分の科目に入っていますが、何をやりたいかということ聞かれます。そして何を言っても、それを専門にしている学者がオックスフォードの中のどこかにいて、いなければ外から呼んでくるということになっています。

チュートリアルというのはどうやってやるかと申しますと、一般の学部学生の場合には、教師から5冊、6冊本を与えられて、君がやりたいと思っている問題についてなら、まずこれを読んで、来週までにエッセーを用意してこいと言われます。

エッセーは、私の場合、ダブルスペースで20枚から25枚、5千字から6千字ぐらい。教師の前でゆっくりはしっかり読むと40分ぐらいかかりますが、それからあとの20分、30分のディスカッションがあり、これは地獄のような経験でありました。

実際に初めて行ったときに、私が何をやりたいかということについて、あらためて私の口から聞くということになって、私は思わず、こういうことをやりたいんだということを全部話してしまったんですね。

「君の結論はナンセンスだが、君の議論は面白い」というのがコメントなんです。これは大変私にとって

はショッキングなことでした。まあ、秀才を気取っていましたから、結論がナンセンスだと言われると、この教師とは馬が合わないんじゃないかと思いました。

たまたま私が非常に親しくしているカレッジの先生、これは日本のことをよく知っている先生、またお話に出てくるかもしれませんが、リチャード・ストーリーという人で、長島さんに奨学金をくれた恩人ですが、そうしたら驚いたことに、「それは褒め言葉だ。最高の褒め言葉だ」と言うのです。結論がナンセンス。まだ勉強を始めたばかりだからナンセンスなのはあたりまえだ、議論が面白いというのが一番大事なことなんだと言うのです。

○長島　すごい人ですよ。

○河合　向こうはそう言うんです。これは英語をやるときに用心しなければいけません、イギリス人は褒めようと思ったら、まずけなします。けなそうと思ったら、まず褒めます。そうやって完全に、一方的に、相手を傷つけないように配慮しているわけです。このあたりが日本人は非常に弱いんですね。「あなたの英語はお上手ですね」と言われたら、もうぐにゃぐにゃになってしまうわけですから。英語上手だが、言うことはナンセンスだと、次に来るわけですから。褒められたら、来るぞと思わなければいけない。これが英語の文法で、フランス語にはこういうのはありません。

ともかく、それは褒め言葉だった。そして議論が面白いというのはいったいどういうことかという話になりますが、「5冊読んでこい」と言って、それを紹介しますと、「それはこの本の意見だろう。俺の聞いたのは、おまえの意見だ」というのが必ず飛んでまいります。ですから、読んだ本は、こちらにとっても参考意見で、それをどれだけ消化しているかということが問題になります。

実際にどういうやり方をするのかと申しますと、この問題についてはいろんな意見がある、しかし、まず自分の結論を先に言います。そして、これについてはいろんな意見があって、A、B、C、D、E、有名な学者のいろんな議論があって、これにはこういう長所があります。イギリスですから、まず褒めなくてはいけない。そして次に、こういう欠点があります。これを全部考え合わせると、結局、私の初めに言った意見が長所は一番大きく、欠点は一番少ないということになりますと、こういう具合に持っていく。これが優秀な論文というわけです。

私は皇太子、浩宮のオックスフォード留学の指導をしましたが、殿下の留学前にチュートリアルの手ほどきをしておいたのが非常に役に立ったというので、あとでお礼を言われました。『テムズのほとり』という浩宮の本の中に出てきます。

やがて教師になりました。私は日英関係、国際関係論が専門で、学生は18歳から20歳ぐらいですね。学生はエッセイを読むんですが、それは見事な完成感がある。イギリスの学生は、おそらく10歳ごろから文章、エッセイを書く訓練を学校で受けていて、文章の中で議論をする。口で言うだけではなく、書くときも議論をするというのに慣れています。

念のために言っておきますが、これは自然科学でも数学でも同じです。ですから、教師になって一番最初に驚いたのは、これは何か間違って、大学者が私のところに習いに来たのではないかと思いましたが、しかしよく聞いていると18歳、20歳の若者ですから、筋の通らないところがあるわけです。

しかしそのときも、いきなりけなしたりはしません。ここは非常に面白かった、この部分、何ページのこのあたりだ、これをもう少し発展させてくれないか、デベロップ (develop) させてくれ、エクスパンド (expand) させてくれ。

向こうが頑張ってやりますと、別のところを、この部分を発展させてくれとやっていくと、だんだんと向こうも気が付いてくるんですね。ここから出てくる結論と、あそこから出てくる結論が矛盾していると

いうことに。真っ青になってきまして、一生懸命自分でつくった罠に落ちないように、それから抜け出るようにもがき苦しむ。そして、息も絶え絶えになって授業が終わる。

オックスフォード大学はそういうことをちゃんと知っておりますから、大学はシェリー酒を用意していて、それを1杯飲ませて、もっとひどいときには、そのあとパブでいっぱいやろうと言ってやるわけです。

あなたは、こことここが矛盾していると思ったけれども、実はそうじゃないんだ、もう一つ高いレベルから見れば、それは一つのことの二つの異なったあらわれ方であって、むしろこれを発見すること、つまり、矛盾した命題を発見して、その矛盾を乗り越える方法を見つけること、これが議論をするということなんだ、そういう教え方をしました。

私の場合はおそらく、自分が外国から来て、こういう教育方法だということを丸飲みしましたから、そのパラダイムどおり見事にやったのではないか。河合はソクラテスだ、若者に問いかけ、そして若者自身の考えを通じて、より高い真理に到達させるのを助けた、彼らの思想の助産婦であるなんて、褒められたこともありました。

こういう研究方法、こういう教育方法というものの意味も考えてください。日本の場合とはまったく逆です。日本の場合、秀才は、教師が言ったことを非常に早く丸覚えして、そしてそれを答案の上に反映して、優を取る。ところが、こういう学問の仕方は、向こうではやらないわけです。何かにつけて疑問を持って質問をして、そこから議論を始める。これがなかったら、学問は成り立たないということになっています。

歴史の研究だと、例えば、私の子どもが向こうの学校に入っていましたが、10歳ぐらいまでは丸覚えの歴史です。ヘンリー八世は何をしたかを覚えていきますが、やがて、例えば、ネルソンがトラファルガーの海戦で破れていたら、世界史はどうなっただろうか。20世紀のイギリスで、もっとも偉大な首相は誰であるか、こんな問題が出てきます。これは誰でもいいんです。たいていの学生はチャーチルを書きますが、しかし誰を選んでもいい。重要なことは、それを説明する議論なんですね。

私の息子は、チャーチルに倒されたネヴィル・チェンバレンという首相、これがもっとも偉大な首相であった。この人がいなかったら、チャーチルはいなかったというようなことを書いて、優等賞をもらいましたが、これはだいぶおやじの知恵が入っていたんです。

物理や数学でも、そういうかたちの教育が基本になっている。本物の教育とされていて、いまでも変わりません。授業料が高くなるのも無理はありません。ブレア政権になって、学生から30万円位の授業料を取るようになりましたが、それまでは全部無料です。外国からの留学生だけは、親が税金を払っていないから授業料を取られます。

しかし日本の場合、教師が言ったことに文句を言わないでさっさと覚えて、それを答案に書いて「優」を取る学生が優等生。そういう優等生をつくり、日本を非常に早く、優れた世界第一級の国にする人材をつくったわけです。日本風の教育というのはおそらく、遅れた国を引き上げるための方法としては非常に能率的だったのかもしれませんが。しかしそれが、例えば1945年、ばかな戦争に入り込み、挫折を経験しなければならなかった理由かもしれません。こんにち、われわれが陥っている混迷も、われわれが教えてきた教育の結果であるかもしれません。

○長島 ありがとうございます。

先ほども言いましたように、2年前に、現在オックスフォードに留学している日本人にちょっと集まってもらって、いろいろと話を聞いて、みんな最終的にはチュートリアルが命だといい、それと相まって、先生の学生に対する面倒見のよさも共通体験として挙げていました。

先ほど河合さんが、終わってから一杯出すといわれました。私の先生などは、いま授業をやってきて疲

れているから、パブでチュートリアルをやろうといわれたことが二度ほどありました。午前11時のことです。子どもを幼稚園に迎えに行くから、車のなかでやったこともありました。幸いなことに、騒音が凄くてこちらの変な議論が聞こえなくてよかったと思っていますけれども。

チュートリアルは一对一の対決ですから、チャンバラをやって、いくら連敗しても一勝でもできればいいんですけれども。でも、それを通じて、いま河合さんが言われたように、考えるとは何だということを考えさせられました。考えるとは疑う事からはじめなければならないということですね。

日本だと疑ってはいけない。信じなさい。反論すると、子どものくせに生意気な、生徒のくせに生意気だと制裁を受けた。そういう弾圧教育では学生の積極性が育ちません。やっぱり日本の教育というのは、小学校程度から根本的におかしいと言ってもいいのではないのでしょうか。

ウガンダでは戦乱で校舎が破壊されマンゴーの木の下で授業をする小学校が少なくありません。物もほとんど無いですよ。でもイギリスの旧植民地ですから、河合さんがいま言ったようなかたちで、子どもの興味を引いて育てる教育をしています。

ある日本の商社の人が言っていましたけれども、ウガンダへ来ると、どうしてこんなに頭のいい人がいっぱいなのだろう感心したそうです。日本人には、黒人は皆ばかであるという大前提がかなり普及しているときに、この発言には嬉しく思いました。

先ほど言いましたように、私は四十何年間アフリカ研究をやっていて、日本に帰ってきて尊敬されたことはまずない。「病気はどうですか」とかね。

話は変わりますが、河合さん、オール・ソウルズ・カレッジがあるじゃないですか。

○河合 ありますね。

○長島 河合さんがおられたプロフェッサーを集めたカレッジです。プロフェッサーというのは各学科に一人しかいないんです。私も自分の先生がプロフェッサーだったから、3回ぐらい食事に招かれました。

あれは定番のせりふなんですかね。「自分の部屋から中庭が見える。こんな美しい庭は、世界ではどこにもない」と先生に言われて、何これと思ったのです。オックスフォードのプロフェッサーであることはそんなに偉いのかと思ったんだけど、次にプロフェッサーに成った人がまた同じせりふを言ったので、これは定番化した誇張ジョークなのかと解釈しました。

○河合 オール・ソウルズ・カレッジの話が出ましたが、これは百年戦争で死んだ、すべての人の霊をまつる万霊祭にちなんでできたものです。

ロンドンからブリストル、それからマンチェスターまで、両方とも500キロぐらいありますが、カレッジの土地を踏んで全部行けるという大地主でありまして、お金がものすごくあります。

どうしてお金があるかと言いますと、オックスフォードの教師というのは、1872年まで結婚できませんでした。つまり、修道院のようなものですね。ですから、かなりの人が司教とか大司教になってもうけますが、そのもうけたものを持っていきようがありません、子どもがいまから。カレッジに寄付するということで、カレッジがもうかる。

タクシーに乗りまして、オール・ソウルズ・カレッジと言いますと、向こうでは Thank you sir. というのが普通ですが、Thank you professor. と言います。それから、こちらがタクシーを降りるときは、Good by professor. と言う。つまりオール・ソウルズの人間は、みんなプロフェッサーになっていました。

ある人類学者が、オール・ソウルズの教師のフェローたちが食卓で話しているものを、アフリカのトライバリズムに例えまして、非常に見事な詩を書いたことがあります。

これは妙なところですよ。私は幸い合格しましたが、アメリカのキッシンジャーは不合格になっています。

彼の手はベトナム人の血で汚れているというのがその理由でした。このコレッジでは、非常にたくさんの人と会いました。

ちょうどそのときの大学全体の学長が、ハロルド・マクミラン、先の首相でありました。彼は食事のときに、ことあるごとに私を隣に座らせる。食事というのは、これは大変なものです。だいたい6時半に人の部屋から電話がかかってきて、誰それが来ているから会わないか、ここでだいたい白ワインが出るかシェリーが出るかするのですが、それから7時に食堂に行く。ガウンを着て、ナブキンはいりません。だから、ガウンはたいい汚れています。

そしてワインが2種類出て、ここでコーヒーは出ません。コーヒーはコモンルーム。食事は学長が主催しますが、コモンルームのデザートは、フェローの一番長老が主催する。そしてここで、ポートとマデーラという酒があるのです。こんな酒を、いまイギリスで飲んでいるのは、オックスフォードとケンブリッジだけでしょう。

これがデカンタに入っていて回るわけです。これはカレッジによっては2回、回るまでは退席できないということになっていますが、私のカレッジでは、客が立つまでは出られないということになっています。

たいていのときには、学長のハロルド・マクミランがいて、「日本からの代表はここに来い」、私を横に座らせました。そして世界情勢について話す。私はちょうどイギリスの首相についても資料を集めていましたから、これは大変勉強になりました。

ポートというのは、こういう小さいグラスで飲むのですが、マクミランはそれをワイングラスで飲めと言います。これは2杯飲んだら明くる日に残ります。それを3杯飲んで、そして飲んで帰ったら、聞いた話をノートにしていける。これも大変な勉強になりましたが、あまり学問系の話になりませんでしたね。

○長島 まあ、いいじゃないですか。いわゆるイギリスの中の非学問部分のある種の結晶ですから。

○河合 けどね、偉い人を呼んでいるんですよ。私の部屋はアラビアのローレンスが使っていた部屋で、部屋の前に彼の像がありまして、毎朝、彼に Good morning. と言って、頭をなでてから部屋に入りました。あんな施設がまだ世界中にまだ残っているのですね。

○長島 それはやはり一種の文化遺産みたいなものですが、知っている人は少ないですね。オール・ソウルズと言われたって、ぴんと来るという人はなかなか。

○河合 ないですね。

○長島 私のいたころは、オックスフォードの社会人類学のアフリカ研究が全盛期でした。プロフェッサーがエヴァンズ・プリチャード。何冊も日本語の翻訳があります。

ところが、このころケンブリッジとロンドンスクール・オブ・エコノミクスが連合して、オックスフォードの人類学をけなしていました。その最たるものは、「パブ アンソロポロジー」。飲み屋の人類学。

どうしてかという、だいたい5時半ぐらいに、Institute of Social Anthropology、社会人類学研究所を出てエヴァンズ・プリチャード教授を先頭に、あと3人ぐらい教師がいてその後に院生たちが行列をつくって、ぞろぞろ歩いて、大きなパブに行くんです。こちらは端っこの方に座るので、先生方が霞んで見えました。皆そこでビールを飲みながら、研究所ではやらなかったような人類学論議をやるのです。

とにかく、こんなに酒を飲んでいて本読む暇があるのかと酒飲みの私が思うぐらい。まだビールですから。あのころ、とにかくウイスキーがめちゃくちゃ高かった。安くなりましたね、いま。ビールというのは冷やさないで飲む。

でも、先ほど申しあげましたリーンハート、私が翻訳して出した先生が、「信弘、おまえはオックスフォードのパブにいる限り、1文も出さなくていい」。と言ってくれました。その後もオックスフォードに行くた

びにばったり会って、よく飲みました。

そのリーンハートは、学生と別れると作家とか芸術家と親交があつて、そういう人たちと飲むのです。サロンの雰囲気でした。人類学者が一人もおらず、詩とか文学の話で、こちらは聞いていてわからないけれども、そういうところにいるのは気分がいいじゃないですか。人類学は5時半までにしてくれとか、そういうところがあつて。

まあ、マクミランが何杯飲んだか、オックスフォードは皆さんよくお飲みになった。

○河合 バブの話もやりたいんですが、その前に、イギリスの教育について、そしてオックスフォード、もともと偉そうな大学の中でもっとも偉そうなオックスフォード大学という話が出ましたが、誤解がないようにイギリスの大学制度、特にどうやって成績をつけるかということについて、お話をしておきたいと思います。

イギリスでは大学の入学試験がありません。高校卒業資格試験（GCSE）という試験が全国的にというか、地域ごとに出まして、これは年に3回ありますが、そしてその成績が発表される。その成績に基づいて、受験生はいろいろな大学に願書を出します。

この大学でフランス文学をやりたいならフランス語で、医学をやりたいなら、数学と生物と何とかについて、高校卒業認定試験で、A（優）を取っているとか、そういう資格がある。その資格が取ってであると、だいたい合格になります。オックスフォード、ケンブリッジと、それからロンドンだけが、もう一つ別の試験をするのが普通です。

大学は10月に始まりますが、学生は1月、3月、6月あたりで、もう合格が決まっています。このギャップイヤーというのをを使って外国へ行く。そして社会奉仕をする。

いま、イギリスの皇太子の息子ウィリアムはアルゼンチンのNGOで働いています。

例えば医学部ならば、あなたは病院に行って、人間の死に立ち会ってきなさい、あなたは手術ばかりをやりがっているけれども、人間の死の問題に直面しなさいといって、病院にやられて、そして病院の推薦状がないと、大学へ入れないというようなことも普通にあります。

大学の卒業のほうはどうなるのかと申しますと、一番というわけではありません、ファースト、セカンド、サード、フォース、落第という5段階の成績がつきまして、オックスフォード大学の経済学の場合ですと、10パーセントぐらいがA（ファースト）を取ります。

オックスフォードのすぐ隣に、ウォーリック大学という大学がありまして、これは新しくできた大学ですが、経済学については、アマティア・センというノーベル賞をもらった人が――いま、ケンブリッジに移っていますが――いまして、インド人の研究者を集めて、経済学では大変によく、そのウォーリック大学では、政治学ではAが一人も出ませんが、しかし経済学については15、16パーセント出ておりました。

一つには、かなりの数の教師がオックスフォードかケンブリッジかロンドンの出身であることもあって、この程度の成績を取ったらファーストだという、共通の理解があるわけですね。

そして、この大学卒業生のファーストから落第までの格付けは、オックスフォードとケンブリッジの場合は新聞に発表になります。ほかはなりません。しかし、日本人の学生が、ブリストル大学に留学して、成績を持って帰ってきますね。そしてそれを日本の大学の単位に換算するわけですが、そのときに必ず、この大学の歴史学の成績は、全イギリスの何パーセントに相当するということが書いてあります。

ですから、オックスフォード大学がいいとか、オール・ソウルズがいいというのは、これはもう全然、世間並みのスノビズム。学生の食堂にも給仕人がいるとか、古いものは偉いとかの事大主義のあらわれでありまして、学問的にはまったくイギリスの全大学、水準は同じです。

ですから、どの大学でもいいからファーストを取った学生は、必ずどこかの大学へ奨学金をもらって、大学院の研究ができるようになっていまして、その点日本では、中部大学の学生と名古屋大学の学生と、卒業生の比較が統一されていない。

そしてそこで、名古屋大学は国立だからと、中部大学は私立だからといったような暗黙の基準ができてしまう。実際には中部大学で、私の教えている学生の中で、非常にいいひらめきを持っている者がいます。こういうものの評価ができない。

日本の大学、教え方について、先ほどもお話ししましたが、エンドプロダクト、大学が製造した品物の規格について、偽装だとか賞味期限切れとかというのは、ずいぶんありそうに私は思う。日本の大学はまだまだこれから構造改革が必要になろうと思っております。時間がないので、パプについてはお話しできません。

○長島 付け加えますと、大学の制度が本質的に違います。まだ学部は3年ですよ。

○河合 うん。

○長島 3年で卒業です。だから、3年間に取得すべき単位は、いまは変わっているかもしれませんが、私のいたころは8単位です。私は学部はやっていませんけれども、カレッジにいと学部学生もいっぱい周りにいますから、いろいろわかります。

いま中部大学、あるいは日本の多くの大学で、4年間の卒業で必要とされている単位が多いですね。中部大学は128単位。何をやっているんだと思います。科目を減らすと、先生が失業するかもしれない。それはそれで構わないとは思うんで。私も定年退職を迎えるし。

そういう単にきまじめさではなくて、戦う姿勢というのかな、単位を取ることにひとつにしても、あれはやっぱり本質的な違いだと私はひしひしと感じました。

その代わり、試験前の学生のプレッシャーはすごいですよ。1ヶ月ぐらい前から、もう本当にびりびり。

私も試験を受けました。これはディプロマコースなのですが、びっくりしたのは、試験を受けるための服装が必要なんです。角帽をかぶって、ディナージャケット、あれは日本語でなんて言うのかな。

○河合 タキシード。

○長島 蝶ネクタイは白でした。黒だったかな。

○河合 試験は白でした。

○長島 試験は白。ホワイト棒タイ、白い蝶ネクタイ。私はキャバレーの用心棒じゃねえぞと思ったりして。それに角帽をかぶり胸にカーネーション一輪さして。

貸衣装屋があります。それから試験当日になりますと、街にカーネーション売り屋が出ます。なんかお祭りなんです。試験ってすごく緊張する。

私がいたころは、ちょうどミニスカート全盛だったのですが、男子学生が悩殺されるといけないというので、試験当日はミニスカート禁止というのが出ていておかしかった。

一人、机一つ、いす一つなんです。席のあいだが空いています。試験時間は1時間でした。私だって一応勉強をしていきましたよ。でも、問題を見て、さあ、と考えているうちにもう、皆さん聞いたことがあるかな、カイコがクワの葉を食べる音、ざわざわざわざわ。みんなすごい勢いで書いている。これはかなわないと思いました。だから私は逆手を取って、いまここで書こうとしているのは、誰それが何年の何ページに書いた物だと参照風の答案を書きました。

2週間後に今度は面接がありまして、試験官は私の答案を前にしている。「君、これはいたずらがすぎる」と叱られました。いえいえ、精一杯の工夫なんですと説明して通して貰いました。

いま河合さんが言われましたが試験の結果の、ファースト、セカンド、一生つきまとうんですね。

私が行ったとき、ちょうど選挙戦で、ウィルソンの労働党が勝って、ヒースの保守党のヒースが負けたのですが、このとき新聞にこういうのがありました。ウィルソンは成績がダブルトップだったけれども、ヒースはダブルセカンドだったと。

○河合 オックスフォードの場合は、大学へ入ると3ヶ月後に、プレリミナリーという試験があつて、そこでいい成績が取れないと追放されます。そして、追放まで行かなくても、ラストイケーション、これは田舎へ行けという意味ですが、語学だったら、その国へ行行ってやってこいという具合になりますし、自分の出身の高校へ帰って勉強してこいとかいうものもあります。

チュートリアル教師のあいだで、あいつは追放すべきだという合意ができて、追放期間も定められていました。

試験そのものは、3年目の終わりに大試験があつて、これは学生は4時間、16枚のペーパーを与えられて書くような、そういう試験です。

ほかの大学について、チュートリアルをやっていない大学について申しますと、オックスフォードでは、講義はあまり重要ではありません。君はこういう論題に関心を持っているなら、あの先生の講義は聴けというだけです。

ほかの大学の場合には、講義があつて、そしてその大教室の授業と必ず小教室での授業を結び合わせます。大教室では先生のほうから学生のほうに、いわば知識が高いところから低いところへ流れるわけですが、小教室のセミナーでは、教師も学生と同じところに立って、先ほど言ったような議論を交わして、議論によって鍛えます。

それから政治学の場合ですと、古典的な作品と一緒に読むというようなことがあります。大教室と小教室の授業、それからそれに基づいてエッセー(レポート)を書かなければならない。

こうなりますと、1週間に取れる科目というのは、三つか四つになります。それ以上はとても無理になります。授業が終わったら図書館へ行って、レポートの用意をしなければいけない。そして1学期の終わりには、風邪をひいて倒れるぐらいの勉強をします。そうやって大学の規格を、全国的に統一していく。

このこともお話ししておきたいと思います。日本では昔、大学の先生が講義をして、それを学生はノートに取るということになっていましたが、このごろの学生は非常に批判的ですから、そう簡単にノートも取らない。だから、どういう教え方をしたらいいのかと、授業をやるたびに考えさせられています。あまり知られていないことですから、ご紹介いたしました。

○長島 というわけで、こんなところでよろしいですか。

○司会 先生たちこそよろしいですか。

○河合 日本の大学教育をどう改革したらいいかということになると、イギリスではものすごく金勘定が細かいんです。授業料を払った分だけもらわなければそんだと考えています。

日本の学生さん、例えば、「アルバイトがありますから、授業休みます」と言っていますね。これは考えてみれば、授業料を払って、それを無駄にしてアルバイトをしているわけでしょう。二重にそんをしている。いったいどうしてかと言うと、親が授業料を払っているからです。だから皆さん、お子さんがいらしたら、大学に入る授業料は自分で稼げという具合に、お子さんたちにおっしゃっていただきたい。

子どものほうも、流行に合わせて、高校を出たら大学に行かなくてはいけないなんてことはやめて、自分が本当に行きたくなったときに、自分で稼いだお金で入ることになると、授業に出たときに、もっとよく勉強するのではないか。

お金をもっと大事にしましょう。本当にイギリス人は、その点ではしまり屋です。

○長島 だから、税金もそうじゃないですか。

○司会 なんか最後に落ちが付いたようになりました。河合さん、長島さん、どうもありがとうございます。

私は横で見えてまして、ここに居るわれわれは、なんてぜいたくな時を過ごしているんだろうと思いつながら聞いておりました。とても楽しいひとときでございました。皆さん、もう一度お二人に盛大な拍手をお願いいたします。

それでは、第二部に入ります前に、ここで10分ほどお時間をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。いま、質問票を回収にまいりますので、ごぞいます方は、係のほうにお渡しください。

第二部

■中国琵琶演奏と留学体験トーク

司会：杓谷茂樹(中部大学国際関係学部国際文化学科)

演奏とトーク：宗ティンティン(Zong Ting Ting)

(中部大学国際関係学部国際文化学科)

○司会 では、このあと第二部では、皆さまには中国琵琶の演奏をお聴きいただきます。演奏は、本学部国際文化学科の教員でもあります、宗ティンティンです。

ティンティンさんは、中国西安出身のプロの中国琵琶演奏家です。6歳で中国琵琶を始めまして、国立西安芸術学校中国琵琶専攻を首席で卒業されました。日本には1997年に留学生として来日し、桜花学園大学を卒業ののち、本学の大学院、国際関係学研究科に進学。昨年、同研究科にて博士号を取得しております。

本年度よりは、国際関係学部国際文化学科講師として教壇に立っている傍ら、中国は雲南省に住む納西(ナシ)族のあいだに伝わる納西古学に関する調査研究を、精力的に進めております。

そのうえプロの演奏家ですから、多忙な演奏活動をこなしながら、また著書も出版され、さらに雲南省に関するテレビ番組の脚本製作とか、リポーターとかいろいろなことをされている、まさにマルチタレントなわけです。

では、ティンティンさん、よろしくお願いします。

○宗 皆さん、こんにちは。

先ほど私も興味深く、私の恩師の長島先生と河合先生の話をお聞きしました。いまはオックスフォードに留学している日本の研究者たちは、日本研究をやっている人が多いという話を聞いたときに、自然に自分のことも思い出しました。私も日本に来てから中国研究が始まったんです。

でもそれは、「灯台下暗し」という日本のことわざがありますが、本当に、逆に外国に行かないと、自分のアイデンティティー、自分のふるさと、文化が見えないところもたくさんあるんですね。日本に来てから、中国の事について聞かれ、でもわからないという恥ずかしさは身体で覚えて、それから自分のふるさとの研究が始まったのが、私が勉強する一つの動機でもあります。

そもそも私は、外国で留学をしている先生方、学生たちの中で、たぶん一番長い人だと思います。いまも留学中なんです。今年4月から先生になったんですけれども。

ちょうど1997年、香港がイギリスから返還された年です。その年に私は日本にきました。

どうして日本に行こうと思ったかという、私は中国のとても古い町、西安、昔の長安ですが、遣唐使たちがたくさん来た街に生まれ育ち、家の近くに空海禪師が修行をしていたお寺もありました。青龍寺というお寺なのですけれども。ですから、国際的な留学生とか昔の遣唐使、そういう存在も小さいときから知っていて、それに無意識の中で憧れているというところもあったのです。

もう一つは、ちょうど私が1975年に生まれた子どもなので、もちろんそういう歴史、第二次世界大戦の暗い教育も、日本語が中国にきたときの話題が漫画になっていて、小さいときからそれも読みながら、しかし家に帰ってくると、日本のアニメをテレビで見て、そういう二つの矛盾している文化の中で育てられた時代の子どものなです。

ですから、日本はいったいどういう国なんだろう。その好奇心が、まず最初に日本に行こうと思った気持ちなんです。

ちょうどいま、日本のアニメも中国ですごくはやっていまして、私が一番最初に見た日本のアニメは『一休さん』というアニメと、『花の子ルンルン』というアニメなんです。それを見て、非常に日本の文化にもかなり大きく影響されて、それで小さいときから、日本に対してとても好奇心を持っていました。一方的にすごく親近感を感じているという。

それで1997年の前に一度、本当に偶然、演奏者として日本にきたことがありました。わずか2週間の演奏旅行なんですけれども、そのとき私の人生にとっては、ひとつ大きな転機になったんですね。

それも本当に長島先生と似ているような感じで、昔から日本に留学をしに行こうと思ったことはなかったんです。当時は琵琶を弾きながら、中国でもテレビに出たり、タレントの仕事もしていたんですね。そうしたらある日、コンクールがあって、そのコンクールは歌のコンクールなんです、琵琶とは全然関係なくて。

なんとなく、「そのコンクールに参加したら」と、うちの父親から言われて、そしてコンクールに行ったら、優勝してしまったんです。優勝したら、そのあと一人の女性の方が追いかけてきて、「ねえねえ、日本に演奏しに行かない」と誘われたんですね。

当時、10年前は、ビザはかなり厳しかったんです。日本に保証人がいないと留学できないという厳しい制度がありました。演奏だけでも審査が厳しいんですね。これはちょっと嘘だろうと、私は信じられなかったんです。

とにかくパスポートをつくりますから、写真をくださいと言われて、それであまり期待をせずに写真をあげて、その1ヶ月後にパスポートが下りて、その1ヶ月半後にビザが下りたわけです。それで琵琶を抱えて日本に演奏しに来たんです。

そうしたら、日本に来て、自分が想像する以上に、自分の琵琶を日本の方たちがすごく歓迎してくれて、そのときの感動をものすごく覚えています。

もう一つは、初めての外国なので、日本に来て「そうか、これが世界なんだ。これが外国なんだ」。私にとってはこれが、中国以外の一つの新しい世界なんですね。ものすごく興味を持っていて、自分はじっと西安にいたままでいいのかなと、そのとき思っていたんです。



それで中国に戻って、次の年から日本に留学しに来ることになったんです。留学しに行こうと思ったときに、かなり反対されました。特にうちのおばあちゃんから反対されました。「日本は怖いよ。日本に行ったらかなり危ないから、気を付けて」と言われました。やはり第二次世界大戦の経験者ですから。

でも、私は一度日本に行ったことがあるし、周囲もかなり親切にしてくれたから、大丈夫ですよと、一生懸命おばあちゃんを説得していたんです。

その次の年、1997年9月24日、思いっきり中国の業績というか。当時、西安市の中で、もっとも期待される芸能人の10人の中の一人と言われたんですね。本当に芸能仕事の中で、もっとも最上期と言われたときに日本に来たわけです。かなり反対されていたなかで日本に来たのですけれども、でも、いま振り返ってみると、すごく来てよかったなと思いました。

日本に来て、最初は大阪の日本語学校に半年通って、もちろん勉強した日本語も関西弁だったのですけれども。でも本当に、来てから日本語も話せなかったし、半年後に少し話せるようになって、そのあと保証人さん——保証人さんは、奈良教育大学の教授なんですね——の家族と一緒に、その先生が桜花学園大学の学部長としてこちらに転勤してきたので、ホストファミリーにくっついて愛知県に来たわけです。

そして最初に言われたことは、勉強しているあいだは、音楽活動を一切やってはだめと、保証人さんから言われました。なぜかという、音楽をやると学業に影響を与えるからと。正直、ものすごくつらかったです。

なぜかという、6歳からずっと琵琶を習っていて、しかも小学校、中学校はずっとダブルスクールだったんですね、私の場合は。平日は普通の小学校、中学校で勉強して、金・土・日になると、ずっと音楽大学の付属小学校に通っていた。

ですから、その当時、同じクラス10人の女の子が琵琶を勉強して、最後にプロになれたのは、わずか二人だけなんです。あとはみんな途中であきらめたりしていたので。そんなに苦労して習った琵琶なのに、日本に行って、その技術を捨てることになるのかと、すごく自分の中では寂しかったんです。

でも、自分はどうしても琵琶を演奏したい。保証人さんと約束をしていたんです。私は演奏もしますけれども、勉強も絶対に頑張ります。最後は学位まで取りたいですと、保証人さんに自分の決心を言いました。

そういう感じで中部大学に入って、中国の雲南省の音楽をずっと研究して、やっと今年は学位を取れました。一番喜んでいたのは、やっぱり自分を日本に呼んでくれた保証人さんです。

そういう感じで、いま思うのは、留学ということは、人生の中で一番大きなギャンブルだと思います。特に、当時私にとっては逃げ道がなかったんですね。日本にいったん来たら、これで失敗して、中国に戻るととても面子がないということなんです。

きっと中国に戻ったら、たぶん新聞とかテレビとか、ティンティンが日本で失敗して、中国に戻ってきたよという、すごくプレッシャーがあったときなんです。ですから、本当に一筋、前しか見ていなかった。後は振り返る余裕がない。そういう時期もありました。

当時の気持ちが、また私の音楽にもすごく出ていて、一番最初に出たアルバムは、日本に来て3年目、2000年のときに出たアルバム。そのときに収録された音楽が、童謡とかふるさとへの思いを込めている曲ばかり入っている。

考えてみたら、そのときやはり、一番将来に対してピンチであって、でも、ふるさとに戻ってもだめという不安な気持ちで、でも、気持ちの中ではすごく寂しかった。ホームシックになった時期なので、自分の音楽の中で、童謡とかふるさとの歌をいっぱい選曲して入れたんですね。

話がいきなり長くなってしまいましたが、私の曲をぜひ送りたいと思います。

自分は日本に来てから、自分の音楽が一番変わったところがあるんです。それは何かというと、音色がすごく優しくなった。

中国にいたときに、競争する意識がものすごくあったんですね。本当に小さいときから、とにかくコンクールで優勝したのが一番という教えがあって、だから、私が早いぞ、私がすごく力強く弾けるぞという環境の中で、ずっと琵琶を弾いていたんです。

しかし、日本に来てから、やはり寂しいとき、うれしいときこそ琵琶を弾くんです。ですから、ものすごく琵琶の存在が、自分にとっては家族のようになった。昔のように道具ではなくて、いまは本当に家族、身体の一部、心臓の一部という感じになってきた。ある意味では友だちなんです。

そういう感じで自分の音色もすごく優しくなってきた、同じ楽曲でも、18歳のときに録音した曲と、いま録音した曲では、全然違う曲のように聞こえてくる。それがやはり音楽の不思議なところですよ。

次の曲は、同じく私が18歳のときに中国で弾いた、中国琵琶の名曲の一つ、『彝族（いぞく）舞曲』という曲がありまして、彝族は中国の雲南省に住んでいる少数民族の一つで、毎年夏になるとお祭りがあります。そのときに女性たちが踊ったり、男性たちが歌ったりする、そういう場面をあらわしている、中国琵琶の名曲の一つです。どうぞお聞きください。

よく言われることは、琵琶を弾き出すと別人のようになるそうなので、どうぞじっくりと観察してください。

<演奏>

ありがとうございます。

実はいま、4月から中部大学国際文化学科の教員になって、平日は教員であって、週末になるとプロの演奏者の気持ちに切り替えをしないとイケないのですけれども、切り替えをするときにすごく大変なんです。

例えばトークをするときも、かなり違ってまして、4月に大学の教員になってから、周りから、特にうちのマネージャーから言われたことは、「ティンティン、週末のトークショーは、なんとなくちょっと説教的になる」などと言われて、本当に無意識の中でそのようになってしまって、これはかなり大変だなと思って。

そのまま週末の感覚で、平日、授業に行くと、また「説得力がない」と言われて、どうしたらいいかなと。でも、人生の中でこんな体験ができて、逆に面白いと思います。

私の変な話ですけども、私は夢が一つあるんです。たぶんこれは実現できないと思いますけれども、小さいときから私はずっとダブルスクールで、必ず音楽、琵琶プラス何かをやっている。いつかは一つだけに絞ってやっていきたいなという気持ちもあります。でも、せっかく脳は二つありますから、すごく有効利用をしていると思いますけれども。

琵琶という楽器も、実は日本とも深いご縁があります。もともとペルシャにあるリュートという楽器が初めにあって、約2千年前のとき、ユーラシア大陸、そしてシルクロードに旅をしている商人たちによって、中国に伝わってきたんですね。

特に琵琶が一番盛んになった時代は、中国の唐の時代なんです。唐の時代、本当に長安はとても国際的な大都会であって、当時は外国から入ってきた楽器はものすごく人気があったんですね。1300年前の琵琶という楽器は外国の楽器ですから、いまのバイオリンやチェロ、ピアノみたいな存在なんです。

そのときに遣唐使がたくさん中国に来て、もちろん漢字だけではなく、音楽もたくさん習って日本に持って帰られたのです。その中の琵琶という楽器も、典型的な一つの例なんです。

そのときに持って帰られた楽器は、いまでも正倉院の中にたくさん保存されています。しかし、正倉院の中に保存された琵琶にとっても有名な五弦琵琶があって、その琵琶だけは、日本の遣唐使が持って帰ったものではありません。

それは当時、唐の時代はととても、こういう楽器はすごく高級品なんです。1300年前の留学生もけっこうみんな貧乏上がりの学生なんです。日本では選ばれた人たちしか遣唐使になれなかったのですが、長安に入ってくると、みんな貧乏な留学生で、こういう高級な琵琶とかを買えないんですね。

それで東大寺ができたときに、中国の玄宗皇帝がお祝いの気持ちで、長安の楽士たちを東大寺へ、聖武天皇のお祝いのために、ちょうど東大寺もできたから、それで高級な琵琶を楽団たちに持たせて日本に来たんです。その楽団たちが最後に長安に戻る前に、その琵琶とかいろんな七弦琴とかをワンセットで、聖武天皇に寄付した。その楽器がいま正倉院に保存されているのです。

今回2月のときに、私は東儀秀樹さんも一緒に、『正倉院の響きは遥か雲南の谷へ』という番組をつくってしまして、とてもありがたいことが一つあって、昔、中国の文化や楽器が日本に伝わってきて、逆に日本ですごくきれいに保存されたんです。特に楽器とか音楽。

例えば、雅楽という音楽は、雅楽で使われた楽器とか、極めて昔の中国の楽器とそっくりなんです。逆に中国は、自分の伝統文化がどんどん変わってしまって、こういう琵琶も、もともと横で撥（ばち）で弾くはずなのに、だんだん立つようになってきて、そして撥ではなくて、自分の爪で弾くようになったんですね。

これも日本に来てみないとわからないことなんですよ。中国にいたままだと、ただ書籍を通じて勉強はできるかもしれないけれども、実際に日本の正倉院に行って、いろんな楽器を見て、また逆に比較したりとかしてからわかったことなんです。

ですから、正倉院の琵琶にとっても懂れて、私はオリジナルの琵琶をつくりました。普通、中国でいま使われている琵琶のほうは、螺鈿とかは一切入っていません。本当に漆が塗ってあるだけです。なぜかというと、音質に影響を与えるのではないかと思われて、螺鈿は一切入れていません。

しかし、日本の雅楽の琵琶とか、昔の正倉院の琵琶を見ると、いまでも割れていなくて、いまでもきれいな音色が出せる。それを見て、私は螺鈿を入れることを決心したんです。こども全部螺鈿は入っています。これはいつも私のコンサートのチケットを買ってくれる人だけに見せるのですけれども。今日は学校のシンポジウムということで、一度、後もサービスで見せましょう。

こういうきれいな螺鈿が入っていますね。上の部分も、正倉院の琵琶とそっくりの柄をここに入れました。いわゆる唐の時代のとき、一番縁起のいい花はボタンの花なんです。ですから、こどもボタンの花の形になっています。下は、天女の絵が描かれています。これもシルクロードのシンボル。日本の薬師寺の中にも同じような天女の絵も描かれています。

そういうわけで、いつもこの琵琶を抱くと、中国の楽器、それだけじゃないですね。アジアの楽器、いわゆる中国と日本をミックスした楽器を演奏している。それが私のいつも演奏しているときの気持ちなんです。

特に留学は日本だけなんです。日本だけに留学したことがあるのですが、演奏者として世界中、いまは12ヶ国ぐらい演奏をしにいったことがあります。

特にキューバは2回も行きて、キューバで演奏しているときに、当時、日本の訪問団と一緒にいったんですね。いつも日本語を話しているし、向こうの人が聞くと、日本語と中国語は一緒なんですね。楽器もそうなんです。ですから、演奏しているとき、本当に私は中国人とか日本人とか、それをこだわる必要はあんまりない。私はアジア人ですとみんなに言ってますけれども。

そういう感じで日本に来て、日本に留学して、ちょうど今年で10周年になりますけれども、自分にとって一番大きな収穫は、やはり勇氣、そして自信を持てるようになったことです。

日本に来たときは何もなかった。本当に夢と琵琶だけを日本に持ってきたんです。その10年の中で、本当に努力をいっぱいしたと思いますけれども。とにかく、夢と自信、あと勇氣さえあれば、どこに行っても大丈夫。それがいま、自分の一番大きな心境かなと思います。そういう気持ちがすごく強くなってきたんです。

ですから若いとき、若いときではなくても、時間のあるとき、ぜひ一度留学したほうがいいと思います。人間が強くなってきます。それが10年間ですごく感じてきたことです。そういう気持ちもこれから、自分が留学した経験も、ぜひ自分の生徒さんたちにも伝えたいなと思います。

ですから、教師としては、自分の経験から言うと、ただそういう知識を与えるだけではなくて、夢を与えることもすごく大事ななと思います。

あまり時間がないので、もう1曲送ります。この曲は中国でお祝いのときに弾く曲なんです。

琵琶の場合は外に向いてはじきますので、特に手の動きが速いから、ぜひ見ていてください。この曲の名前は『出水蓮』です。

本当にこれからの先生方のパネルディスカッションもぜひ楽しみにしてください。

ありがとうございました。

<演奏>

○司会 ティンティンさん、ありがとうございました。心の洗われるような音色でした。ここでもう一度、拍手をお願いいたします。

それでは第三部に入ります前に、ここで舞台準備がごさいます。少々お時間をいただきたいと思います。

第三部

■パネルディスカッション

「何が学べるのか？ 何を学ぶべきか？ ―いま留学を問い直す―」

司 会：中山紀子(中部大学国際関係学部国際文化学科)

パネリスト：河合秀和(中部大学国際関係学部国際文化学科)

長島信弘(中部大学国際関係学部国際文化学科)

野田真里(中部大学国際関係学部国際関係学科)

伊藤裕子(中部大学国際関係学部外国語教室)

中野智章(中部大学非常勤講師)

○中山 お二人の基調トークと、心洗われる琵琶演奏を聴きました。それでは、パネルディスカッションを始めたいと思います。

司会の中山です。私は文化人類学でトルコ研究なのですが、長島さんが言われたように、文化人類学の場合は、いきなり欧米を学ばずに調査に行くことが多い例と同じく、私もトルコにいきなり行ってしまった者です。

ただ最初の留学は、イギリスのブリティッシュ・カウンシルと同じようなアメリカのロータリー財団か

らの奨学金でトルコに行けたことを思い出しました。すぐにトルコに行ったのですが、やはり欧米の力を借りているかなということです。

今日はお二人の基調トークを踏まえて、中部大学の国際関係学部で教えている3人の比較的若手の人たちに、ご自身の経験と、お二人への質問なりコメントを語っていただきます。そののち、ディスカッションにしたいと思います。お三方はそれぞれ、伊藤さんがサセックス大学、野田さんがロンドン大学、中野さんがオックスフォード大学に留学されています。

その前に、先ほどお配りした質問票を回収しましたが、お一人だけ、口頭でお聞きしたいという方がいらっしましたので、先にその方の質問を聞いてから、パネルディスカッションに入りたいと思います。

○会場1 失礼いたします。三点ほどございまして、どなたでもけっこうですからよろしくお願い申し上げます。

まず一つ目は、漱石の英国留学中の言動、苦悩の主なものは何であったのか、という質問です。次に二つ目は、留学に際しましては、語学を習得するのが先か、今までやってきた研究を続けるのが先かといった問題もあろうかと思います。それこそ限られた期間内で、その折り合いをどうつけるのかお聞かせください。極端な話、留学しても原書すら読めないというようなことがあるのではないかなと思いましたので。そして最後に三つ目の質問ですが、フルブライト留学をはじめとする現在の留学支援のありようについてお聞きしたいと思います。以上です。

○中山 はい、ありがとうございました。それでは基調トークをされたお二人に。

○河合 まず夏目漱石から、彼はノイローゼになってしまいまして、下宿しているところの女中さんに、「ストローという単語を知っているか」と言われたときには、大変なショックを受けたと書いておりますね。大学者が、藁の英単語を聞かれたのですから。

しかし、これは私の独断ですが、漱石の苦しみというのは、先ほど長島さんやティンティンさんが言われたことにも関係していると私は思っています。

というのは、結局のところ、ロンドンとケンブリッジに漱石はしばらく行きましたが、英文学の研究に來ているはずなのに、日本とは何かということを問わざるを得ない。そのことが、イギリスに英文学を勉強に來たということと同時進行して、一方がなければ他方があり得ないような、そういう関係にあったと私は読んでおります。

その点では、漱石の体験というのは、彼自身の独特の体験だったのではない。他の日本人留学生も結局のところ外国へ行って、日本とは何であるかという問いを自分に問いかけた。ずいぶんいます。私の友人などでも、アメリカに留学して、初めて自分が日本についていかに無知であったかということを知って、

そして勉強し直したというのがいます。

日本から留学する場合、語学の問題で言いますと、漱石は小泉八雲の授業に出て、ほとんど完全なノートを取っています。語学はよくできたはずですが、それでもそういう悩みがあった。

ちょうど月給400円の外人教師を、月給100円の日本人教師に変えて、安く上げようという体制が始まった。その波も重なったのかも知れません。本当に英文学の勉強だけをやっ



ていたら、ああいう悩みにはならなかったでしょう。

○中山 ありがとうございます。それでは、第二、第三の質問を。

○河合 私はブリティッシュ・カウンシルの試験を受けて、長島さんは大変な試験だったと言われましたが、私もそうです。私は英語の読み書きには不自由はなかったのですが、話すほうは、戦後のアメリカ占領下のときで、NHKのヒラヌマ英語教室、Come come everybody. How do you do and how are you? Won't you have some candy? one and two and three four five という歌で始まる英会話の番組がありました。漱石のワラではありませんが、いささかバカにした歌です。だから私は、英語の会話を勉強するよりは、フランス語をやっていました。

ブリティッシュ・カウンシルの試験は、英作文、これはエッセーを書くものと、ディクテーション、これも難しい単語がたくさん出ました。それから会話の試験までありました。会話のときに面接の部屋へ入ったら、どこから来たというんですね。で、隣の待合室から来たと言ったんですけど、面接のイギリス人にはやりと笑って、どこで生まれた、Where were you born? と聞き直しました。あとで気が付いたら、Where do you come from? と現在形で聞いていたんですね。ああ、そういうことか。俺は落ちたなと思ったりしました。

言葉の問題について言うと、これは、例えば自然科学者で数学をやっている人なら、おそらくほとんど不自由はないと思います。黒板に書けばいいわけですから。ところが私のように、外国の人の心を知ろう、歴史の資料を読むだけではなくて、心までを読み取りたいということになると、それはずいぶん大きな問題がありました。

最初の3ヶ月は悩みました。3ヶ月目に、何か行き詰まったという意識があって、真夜中に、俺は秀才だ、よくできるんだということを自分の背中に担いできた。秀才と思われようがバカと思われようが、何だっていいじゃないか。自分は自分なんだ。そういう決心をしたら、ぐっすり寝られました。そして明るく朝から、英語が非常にうまくなった。

それまでゼミで、大学院ではゼミがあるわけですがけれども、ゼミの中で質問してやろうと思っているのですが、いい質問をしなくてはいけない、褒められるような質問をしなければならないという気持ちになります。すると、頭の中で英作文をするわけですね。

そんなことを迷っているあいだに、ほかの学生が質問して、That is a good question. それはいい質問だと先生は言っている。しまったことをしたと思いましたが、もうその文化革命が起こった日から、作文をしないでいきなり質問をするということになりました。そうしたら、たちまちうまくなったと思います。

私は天才じゃないかと思ったりしましたが、ところがまた1週間ぐらいたつと、またばろが出て。その繰り返しです。いまでもそうです。

○長島 私は自分の学生が留学をしたいというときには、英語圏なら、英語を勉強していけとは言います。やっぱり、聞いてわからなくて、読んでわからないというレベルであつたら、完全にお金と時間と精神の無駄になりますから。

私の場合には、国際基督教大学という英語圏にいたので、話すのはいいかげん何とかなってました。読むのは平気なんです、英語を書くという作業をしたのは26歳からなので、これはなかなか進歩がない。小説をいっぱい読んで、表現を覚えるじゃないですか。成るべく真似して書くようにしました。

だから、ご質問に答えれば、やはり準備は必要だと思います。私の場合ブリティッシュ・カウンシルが、イギリスへ着いて3週間、非英語圏の学生を集めて、英語特訓をやってくれたんです。あれは非常に良かったです。それでよろしいですか。

○河合 外国留学を支援する制度のご案内ですが、ブリティッシュ・カウンシルも有名ですし、それから

アメリカのマンスフィールド上院議員がつくったフルブライトも有名です。ローズ・スカラシップ、これはアフリカの金鉱で大きく稼いだセシル・ローズがつくったので有名です。

例えばクリントン政権12人の閣僚のうち、10人までがこの奨学金でオックスフォードに留学しています。オックスフォード・マフィアと言われないように、彼ら自身はあまり書きませんでしたが。

日本の場合、これまでお世話になりっぱなし。だから、何とかお返ししようというので、いろいろなものがいま出ております。例えばロータリーも日本でやっていますし、大和証券のものもありますし、笹川財団というものもありますし。私も小さなものをつくったりしています。

貧者の一灯で何かがやりたいと思っているのですが、ローズ・スカラシップやブリティッシュ・カウンスル・スカラシップのような、ああいうものはなかなかこれからは出来ませんね。特に日本はもうお金持ち。だから、自分のお金で行きなさいというようになってきましたね。

○会場1 お話ありがとうございました、フルブライトは、フルブライトという人間そのものではございませんか。ただいま、マンスフィールドとおっしゃいましたけど。

○河合 いや、マンスフィールドが実際に法律をつくるときに、非常に有力な働きをしました。それでフルブライト奨学金は、マンスフィールドがつくったとアメリカ人は言います。

○会場1 ありがとうございます。

○中山 よろしいですか。ありがとうございます。何を聞いても、たちどころに面白い話になっていくお二人ですね。

それでは、若手の3人からお話を聞きたいと思います。まず、サセックス大学に留学された伊藤さんからお願いたします。

○伊藤 私、伊藤と申します。私はちょうど両先生が留学されたところに生まれておりまして、若手というわけではありません。1960年代ですから。

いわゆる古きよき時代に留学したものでもなければ、格調高いオックスフォードでもなく、私の経験談はちょっと格調が下がるかもしれませんが、お聞き苦しい点はどうかお許してください。

サセックス大学といいますのは、ブライトンという街にありまして、ロンドンから真南にちょうど電車で45分ぐらい行ったところの海岸沿いの街にあります。キャンパスが Areas of Outstanding Natural Beauty (特別自然美観地域)と言われる非常に美しいところにあります。

私は1994年にそちらの人文科学研究所で英文学、特にヴァージニア・ウルフの小説を研究しまして、1年間のMAコース(Taught Course)に入りました。このコースでは、4つのセミナーへの出席、タームペーパー4本、そして修論が課されます。

MAを取得したあと、1995年から、同じ大学の博士課程に進学し、また別の研究を始めましたが、途中で資金が尽きてしまいました。

ロータリー財団の奨学金と、イギリス政府から Overseas Research Students Awards という海外の学生と国内の学生の学費の差額を埋めて、国内やEUの学生と同じレベルの学費にしてくれるという奨学金をもらいまして、それで何とかやっていたのですけれども、途中で帰国したり、結婚して非常勤で稼ぎ、出産があったりなんかして、結局、今年の1月に学位を受けたところです。

サセックス大学というのは、歴史の古いオックスブリッジとも違いますし、また、19世紀に資本家の資金を基に創設されたロンドン大学のような red brick university、赤レンガでつくられているので red brick と言うのですが、そこも違いまして、plate glass university と呼ばれます。日本語にすると、板ガラス大学となってしまう。red brick でさえ、ちょっと蔑称なのですが、それよりもさらにひどくて、無機質で味わいの

ないというような感じです。ガラスとコンクリートの校舎で、実際モダンな校舎です。

これは戦後になってつくられた新構想大学で、イギリスの大学進学率を上げるため、イギリスで初めて公的資金と税金を投入して、1960年代につくられた大学です。

この plate glass university (板ガラス大学) のサセックス大学ですが、その創設には特徴あるポリシーがあります。それはこれまでの大学制度の持っているエリート主義、そして偏狭なアカデミズム、保守主義から決別し、イギリスの高等教育の覚醒を狙ったものです。そして、伝統的な学問分野を超えた学際的な教育を目指しているわけです。

しかし、オックスブリッジの特徴、チュートリアルですとか、各地にキャンパスが散らばっているのではなく、1ヶ所に拠点を置いた、コミュニティーとしてのキャンパスという要素も多く取り入れています。

私がこの大学に留学にしたきっかけというのは、英文学を専攻していますから、本場のイギリスの大学で学んでみたかったからです。サセックスを選んだ理由というのは、私が興味を持って読んでいたヴァージニア・ウルフという小説家が、その大学近辺の村に住んでいたこと、かつ、サセックス大学の図書館に、ウルフの残したマニュスクリプトが多く保管されているからです。サセックス大学というのは、ヴァージニア・ウルフ研究にとっては聖地の一つであるわけです。

また、サセックス大学というのは、当時、文学研究においても話題になっていた、カルチュラル・スタディーズ(文化研究)ですとか、ポストコロニアル批評が盛んにおこなわれている場所でもあります。

実はサセックス大学には世界的にも有名な研究所 IDS (International Development Studies) がありますが、ポストコロニアル批評にもさかんな国際開発学の影響が見受けられるように思います。こういった意味でもとても学際的な雰囲気にあふれています。

修士課程のコースではセミナーが週に2回ありました。10人ぐらいの規模で、どんどんと発言をして、議論に貢献をする事が大切です。じっと先生や他の学生の話聞いてばかりいると、もう自分はその場で存在しないに等しくなってしまう。ブローケンイングリッシュでも、考えを発言することが大切です。「君はほかの日本人とちょっと違うね」と言われた時には、セミナーでは発言しない日本人という常識を破ることができたわけで嬉しかったです。

MAコースにはどんなコースがあるかということですが、日本ですと、英文学は学部で1コースしかありません。しかしここの大学では、10コースぐらいのMAコースがあります。例えば、ポストコロニアル文学、批評理論から、同性愛文学のコースまでありました。

それぞれのコースでは、必ずしも英文学を扱うのではなくて、さまざまなテキストを研究しました。ですから、以前は学問対象にならなかったような大衆文化や、大衆行動も研究の対象となり得ます。

その中でも特に勢力が強くて、人文学研究所全体に大きな影響を与えていたのは、同性愛的な視点からの文学研究です。日本では実はこのテーマというのは、現実にとちよつとためらわれる分野ですが、こういった分野も堂々と研究できる学部であり、この分野の大家がたくさんいました。

このような環境の中で、自分もホモだとかレズの人たちを自然に受け入れるようになったばかりか、なんと自分の博士論文も、ホモセクシャルで有名なグループを選んでしまったわけです。実はこのブライトンという場所も、イギリスの中で一番ホモセクシャルの人たちが多い場所と言われています。

私はそのあと、ドクターコースに進みました。これは先ほどから先生方が言及された、イギリスのチュートリアルの伝統が根付いた教育がなされ、授業を受ける必要はまったくありません。そこはアメリカとは違います。

そしてチュートリアルで、一対一の指導で、自分の博士論文を仕上げていくのですが、私の指導教授は

たまたまオックスフォード出身の先生でしたけれども、とにかく私のやりたいようにやらせてくれたんです。章ごとに原稿を書いて提出すると、彼は論理から英語に至るまで細かくチェックを入れてくれました。とにかくやりたいようにやらせてもらえたのが、私の大学でした。

私の大学、またイギリスの大学というのは、課程博士号を出すためのシステムとかノウハウが文書化されておりまして、それに従っていけば、確実にドクターが取れるというところは、私はもともと名古屋大学出身ですが、日本とは違うなと思いました。放任主義であるようで放任ではないわけです。

サセックス大学というのはカレッジ制ではなくて、ちょうど中部大学と同じような中央集権的な大学のシステムで一拠点のキャンパス内に学生用の集合住宅もあります。学内のフラットを借りて、友だちとシェアをしている人もいましたが、私は慣れない外国では最初の年は安全を期して、キャンパス内の一戸建ての家を、他の学生と共有して住むタイプの居住施設に住んだわけです。

私は当然、女性オンリーの居住施設を申請しました。しかし、ふたを開けてみたら、男性が一人いる。イスラム教徒を除いては、一つの家に男女が共に住まう事になっていたのです。また驚いたことに、イギリス人は一人もいない。5人住まいのメンバーは、スリランカ人、タイ人、香港人、台湾人、そして私、日本人でした。キャンパスを歩いてみると、二人に一人ぐらいは、アジア人かアフリカ系といった感じで、とても留学生が多かったです。

ところで、私はこの1月に学位授与式のため、再びサセックスを訪れました。授与式の際、サセックス大学の総長は、映画俳優でもあり、監督でもあるリチャード・アッテンボローなのですが、心に残るスピーチをしました。

感銘を受けたのは、サセックス大学では、どのような階級であれ、どの国の出身であれ、肌の色を問わず、貧しくても、シングルマザーでも、ホモセクシャルでも、いかなる宗教でも、誰でも教育を受ける権利があり、サセックスでは平等に教育の機会を提供するのだと断言しておりました。そして、サセックスの卒業生は、世界の教育をリードする存在として、サセックスでの教育の信念を貫いてほしいというスピーチがありました。ここで、学生、先生方も含めて、皆感動して立ち上がり、奇声を上げて、拍手で賞讃したことが、まだ記憶に新しいです。

私のサセックスの経験のまとめとしては、学際的な研究ができること。いままでの文学部、経済学部、法学部とか、そういう縦割りの学問的区分ではなく、インター・ディシプリナリな研究ができること。そして、社会的にマイノリティーであることは、自分もマイノリティーだったのですけれども、それは研究において、かえって強みになる要素であったかもしれない。しかし、もちろんこれは結局、イギリスのジェントルマンシップや、ノブレス・オブリージュによって、そう思い込まされていたかもしれません。

私の経験はこれぐらいにいたします。

○中山 はい、ありがとうございました。

モダンな板ガラス大学の中で、同性愛研究とかいろんな面白いことがあったようです。

それでは次に、野田さんお願いいたします。

○野田 その前に確認させていただきたいのですが、本当に10分しゃべっていいんですか。

○中山 5時に終わったほうがいいんですかね。

○野田 じゃあ、8分30秒ですね。

○中山 そのぐらいですね。ありがとうございます。

○野田 ご紹介いただきましてありがとうございます。国際関係学部准教授の野田と申します。パンフレットを見られた方の中には、女性と思われた方がいらっしゃるかもしれませんが、男でございます。座って

失礼します。

長島先生と河合先生、大変面白いお話をありがとうございました。私がお伝えしなかったメッセージは、かなり両先生がお話しになられているので、お二人のお話を踏まえつつ私の経験をお話したいと思います。

まずはイギリス流の勉強の仕方についてです。これはすでに両先生がおっしゃいましたけれども、要するにクエスチョンなんですね。クエスチョンに対して答えるということを徹底的にトレーニングされました。そこで今日も、杓谷先生が出されたクエスチョンに答えるかたちでいきたいと思います。

杓谷先生が事前の打ち合わせと本日冒頭でおっしゃられたクエスチョンは二つです。日本人がいま欧米で学ぶことに意味があるか。私は、これはイエスだと思います。日本ではだめか。これも半分イエスで半分ノーです。これもイギリス流に、最初に結論を述べさせていただきました。

なぜかと言いますと、戦う姿勢がまるで違います。私がなぜイギリスに留学したかと言えば、その点に尽きるだろう、と。ただ私は外国と戦うつもりはないですし、私の仲間と戦うつもりもないです。

では、何と戦っているのかと言えば、貧困であり環境破壊であり、グローバリゼーションが進むなかで私たち人類が直面するさまざまな問題と戦っているつもりです。

私自身、実は留学を2回しております。最初はフィリピンにあるデラサール大学に留学して社会開発を勉強しました。これは、1992年から1993年にかけての時期のことです。

なぜか。私はもともと経済学を勉強していたのですが、どうも経済成長だけでは貧困はなくなる、これはやはり実際の現場に行ってみないとわからないのではないかと考えたからです。まさにその年、フィリピンは空前絶後の大不況でありまして、経済成長がマイナスというのはどういうものなのか身をもって体験しました。

皆さん、どんな感じかわかりますか。気温が40度の中で1日なんと8時間も停電するんです。ごみは集めに来ない、マンホールはふたは開いたまま、そこに人が落ちて溺れて死ぬ…。これはマニラの話ですが、地方に行ったら本当に餓死者は出るし、それはもう大変な状況です。

こうした状況の中で勉強していたわけですが、やはり経済だけではだめだろう、国家が果たす役割に期待するだけでもだめだろうとの結論に達しまして、あとでちょっとお話するNGO（非政府組織）とか、市民社会の役割が大事なんじゃないかと考えるようになりました。そこで私は実際にフィリピンのNGOで活動し、その後日本やカンボジアで活動してきたわけです。

実際にやってみてわかったことは、人の善意だけでは世の中の役には立たないということです。もちろん善意は大事なんですけども、どうすれば実際の貧困や開発に対して市民社会とNGOが役立つようになるのかを考えまして、これはやはり日本だけではだめだ、現場も見ないと、と。とはいえ、現場に行ってみて一生懸命やるだけではだめなので、もう少ししっかりと学問的に勉強しようと。そう考えながらいろいろと探したときに、世界でそこしかなかったということです。ですから私は、日本、現場、そしてイギリスというトライアングルの中で研究を進めたと言えます。

私は先ほど、日本人が欧米で学ぶことに意味があるかとのクエスチョンに対してイエスと答えました。それに関して五つほど申しあげたいと思います。

私が勉強したところは、ロンドン大学の London School of Economics & Political Science というところです。親に言ったら、舌をかわからやめてくれと言われましたが、通称 LSE と呼ばれているところです。

これも両巨頭には申しわけないのですが、日本で言えば早稲田大学みたいな感じですね。オックスフォード、ケンブリッジが東大、京大で、ロンドン大学が早稲田。実は私は早稲田出身なんですけれども…。要

するに、イギリス国教会がつくった伝統的で保守的な、しかも男しか入れない大学に対して、当時ロンドンを中心に勃興してきた市民階級の人たちが作った大学です。

話すと長くなりますが、ロンドン大学という大学は実はないですね。試験のときはロンドン大学としてやるのですが、実際にはいろいろなカレッジがありまして、その中の一つがLSEということになります。

私がLSEを選んだ一番目の理由は、世界のトップクラスの学問というのを見てみたかったからです。両先生もおっしゃられていましたが、イギリスにはものすごく学問の蓄積がございます。近代化の陰でイギリスが抱えていた貧困問題に対して、福祉国家、いわゆる「ゆりかごから墓場まで」が登場し、社会政策と呼ばれるものが打ち出されてきました。その中でも、特に市民社会の果たす役割が大きな議論を呼び、日本とは比べものにならないほどの蓄積が生じました。それが一つめの理由ですね。

次に、二番目の理由ですが、世界で頭がいいとされる人たちはどれぐらい頭がいいのか一度見てみよう、という野次馬根性がありました。これは自慢するわけではないのですが、先ほどの議論でも世界ランキングの話が出ていました。いま一番よく言及される世界ランキングに、『タイム』という雑誌が出している世界ランキングがあります。オックスフォードは確かハーバードの次、世界ランキング第2位だったと記憶していますが、LSEは第10位です。ただし、社会科学だけに限って言うと、世界ランキング第1位なんです。

イギリスには、何とか大学だからいいとかではなくて、どの分野でどの大学がいいかというランキングがあります。レーティングがあって、ファイブスターが一番いいのですが、LSEにはそのファイブスターが付いていたんですね。それで、どんなものかちょっと見てみようという気が起きました。

次に、三番目の理由ですが、志を同じくする仲間、先生方と交流するなかで、日本にいてはできないであろうことをやってみたいという願いがありました。先ほど伊藤さんがご説明にされましたけど、LSEは講義とセミナー、そしてチュートリアルという三本立てになっています。講義のクラスには、なんと30カ国の学生がおりました。イギリス人は二人だけです。同じ国籍の人が3人以上いる国はありませんでした。日本人は二人しかいなかった。一番多かったのがパキスタン人で3人ですね。

やはり、みんなそれぞれが、自分たちの国の貧困とか、そういうことを考えてきていました。まず、本気度が全然違います。そもそも、負担がめちゃくちゃ大きいんです。私は当時、約1万ポンド払いましたので、学費だけで200万円ぐらいかかるんですよ。しかもロンドンでは生活費がものすごく高いです。私たち日本人はそれでも何とかしますが、アフリカの国などは1年間の国民の平均所得が200ドル、つまり2万円ちょっとですね。そういう国からも学生が来るわけです。もちろん、奨学金をもらう場合もありますし、一族郎党、親類縁者から金をかき集めてくる場合もあります。いずれにせよ、気合いの入りが全然違う。そういう人たちは人生をかけて、あるいは国の期待を一身に背負ってやっているの、それはもうすごい意気込みなわけです。

先ほど、頭のよしあしの話がありましたが、それ以前に本当に命がけでやっているということがあるんですね。ですから、黙ってはおっと座っていると、私語をすることは絶対にあり得ないです。金銭感覚のことを先生方はおっしゃいましたけれども、とにかく絶対にもとを取ってやる、もとを取って帰ってやるという意気込みがあります。

私はこの点では、日本人、日本の学生はだめだと思っています。ちなみにこの中で学生さんはどれぐらいいますか。学部学生はどれぐらいいますか…。やはり、こういう感じですね。私は学生にも、これは授業料の一部だと言っています。しかも、非常に恥ずかしいのですが、私は知っている学生に対して留学を促す姿勢を貫いているんですけども、イギリスに行くと言っている学生ですら今日来ていません。もう話にならないなという感じがします。

次に、四番目の理由ですが、鍛えられ方がまるで違う。とにかくものすごい量の宿題が出ます。アサメントと言って、読む宿題が出るのですが、1科目でだいたい100ページぐらいとか平気であるわけです。それをみんな、別に文句も言わずに黙々とこなしていきます。なぜかという、金を払って勉強しているのだから一生懸命やるのは当然だ、そういう考え方に立っているからです。

これは河合先生がおっしゃっていたことですが、私も学生で行って本当によかったと思っています。当時、私は博士課程にいたので、いわゆる客員研究員で行こうかと考えたこともありますが、そのときの指導教官に「野田は客員研究員で行ったら絶対に遊ぶから、それだけはやめろ。おまえみたいなやつは、ちゃんと学生で行って勉強しろ」と言われました。それはあとになってみると非常に正解だったと思いますし、とてもいい仲間ができてよかったと思います。

そして最後に、五つめの理由、「理由」というよりはむしろ「論点」なのですが、Why not America? ということです。これは両先生にもちょっとおうかがいしたいことですね。私自身もかなり考えました。

私の分野で言うと、グローバリゼーションが進んで貧困とか環境破壊が起きている。私は、それがすべてアメリカのせいだと言う気はありませんが、現実には二酸化炭素の4割はアメリカが排出している。アメリカの勧める新自由主義、つまり市場万能論は世界各地で格差も生んでいます。それは日本も例外ではありません。そういうことを考えると、やはりアメリカが気になるんですね。

では、どうしてイギリスなのか。私が学んだ LSE の当時の学長は、アンソニー・ギデンズという社会学者の先生でした。私も実際に習ったことがある先生です。彼は「第三の道」ということで、市場万能でもなければ旧来の社会主義、福祉国家でもない、もう一つの違う道を進むべきだと主張しました。その政策が前のブレア政権、いまの労働党の政権の柱になっているわけです。

ここで話をまとめましょう。グローバリゼーションが進んでいるなかで、さまざまな危機が起きている。貧困や環境破壊、格差の拡大など…。これらの問題とどう戦うか、これは私の一貫したテーマです。私のように社会開発を専門とする研究者の責務はそこにあるのではないかと、私はそう考えます。私が日本ではだめだと言ったのは、この意味においてです。もちろん例外的に、そのような雰囲気醸し出している国内の大学もあるんですね。先ほど ICU (国際基督教大学) の話が出ましたが、この界限ですと名古屋大学の国際開発研究科は授業がすべて英語で、学生の半分以上は留学生です。私もそこを出ましたが、それ以外のところではなかなか難しいのではないのでしょうか。

とはいえ、同時に私はイエスでありノーであると言いました。では、イエスとはどういうことかといいますと、そういった環境に身を置き、本人がその気で頑張ればイエスだ、ということです。留学さえすればいいのだと私は全然思いません。逆に、漫然と留学してだめになった人をたくさん知っていますから。

例えば、私の学生などでも、漫然と留学して、留学したら英語ができるようになるだろうと思って行く人がいますが、それは嘘です。私はそうは思いません。頑張らないと絶対にできるようにはなりません。ですから、結論としては、日本でだめなやつは留学してもだめだ、日本で頑張らないやつは留学してもだめだ、そういうことになるかと思っています。

グローバリゼーションが進むなかで、これから日本が、私たち一人ひとりが地球的な視野に立って、どうやってそのような課題と戦っていくか、その方途を知るうえでも留学の意味はあるかと思っています。そういった観点から両先生にあとでお話をいただければ幸いです。ありがとうございます。

○中山 はい、ありがとうございます。質問が出ましたが、あとでお答えいただくことにします。

それでは最後の若手、中野さんをお願いします。

○中野 河合先生、長島先生、今日は先生ではなくて「さん」と呼ぶようにとされています。

先ほど、お二方がオックスフォードの教育のことについてはほとんどお話になりました。実は私も、先生がイギリスにいらしたところに生まれた人間ですので、30年違うとどうなのかなと思って拝聴していたのですが、やっぱり同じですね。

イギリスへ行った理由は、先ほど長島先生は、日本研究をしに日本人は行くんだとおっしゃいましたが、実はその対極で、専門は古代エジプト文明の研究なんですね。残念ながら日本で本格的に勉強するところがないんです。早稲田大学は非常に有名ですが、あれは研究所として持っているわけで、みんな考古学であるとか、歴史学であるとか、そういうところで自分でやっています。

私の場合は本当に偶然で、たまたまオックスフォードの先生が日本に来たときに知り合いまして、東京とか関西地区だとたくさんお付きの学生がいたんですけども、名古屋は誰もやっている学生などなくて、2人して伊勢神宮へ行ったというのがきっかけです。

そういった経緯でイギリスへ行ったのですが、実はまず一生懸命に勉強をしたのは、古代の象形文字でした。本当に毎日毎日象形文字をひたすら読んで、最後には夢にまで出てくるようになった。

その傍らでやったのはやっぱり、先ほどおっしゃっておられたチュートリアルという授業です。もともとは大学院で行ったのですが、結局日本でエジプト学の基礎を勉強していないということで、学部から入り直したわけですね。自分より年が若い子たちと一緒に、イギリス人でもあまりやらない学問分野なので、1学年が3人でした。

3人で先生の研究室に行って、毎日象形文字や歴史やらを学ぶのですが、チュートリアルというのは、1つの課題を与えられて、例えば、「古代エジプトの宗教と王権の関係について論じなさい」というようなテーマを与えられて、そこに手掛かりとしてまず読むべき文献のリストが並んでいまして、古代エジプトに関する、いわゆる英仏独はあたりまえですけども、イタリア語や、古代エジプト語やら様々な言語の文献が当然と言わんばかりに与えられるわけです。それが学部生ですから、17歳、18歳の高校出たての新入生にいきなりそれを出すわけです。でも、それをみんな黙々とこなしてそこから10ページ程のエッセイを仕上げていく。

そのときに私が本当に感じたのは、先ほどもお二方のお話を聞いていて本当にそう思ったんですけども、先生がとにかく必死で教えるということでした。

例えば私が、与えられた文献を手掛りにいろんなほかの論文や文献も調べてエッセイを書いたら、先生は、私のエッセイにコメントをつけるときにはそれを全部自分で読むんです。私が読んだものも全部フォローして読んで、その上で真っ赤になるまでエッセイを直してくれて、それで最後に皆でディスカッションをするわけなんです。

そういう本当に手づくりの教育というのか、確かに偏狭なアカデミズムの一端のような気がしない訳ではないのですが、ものすごく一生懸命教えるんですね。その傍らで、本当に先生は研究所の中を走り回るようにして、一生懸命研究にも取り組み、それこそ世界的な業績をばんばんと挙げる。

先ほど野田さんもおっしゃられていたことですが、世界のレベルを知ることができたというか、これがトップのレベルなんだということを身をもって知ることができたのが、私にとっては非常に貴重な財産となりました。

そしてもう一点だけ付け加えさせて頂ければ、それに加えてカレッジというのがオックスフォードにはありまして、これはなかなか日本では馴染みがないのですが、学生が寝泊まりする寮のことを言います。そこには先生たちも部屋を持っています。

カレッジというのは、べつに一つの専攻に限ることはなくて、数学をやっている者もいれば、医学をやっ

ている者もいれば、文学をやっている者もいる。そこには24時間使える図書館もあれば、飲み屋もありますし、教会も食堂もありますし、ありとあらゆるものがそこに揃っています。

オックスフォードは確かに非常に古典的な大学ですが、あそこがいろんな人を世界中から引きつけるのは、そういうカレッジが40近くあって、それはすなわち40ぐらいの大学が1ヶ所に集まっているということでもあるんですね。

そういうところで切磋琢磨して、カレッジ同士がある意味競争していますので、そのなかでみんながもまれていくという良さがあるように思います。毎日絶えずどこかのカレッジや研究所で講演会が開かれていますし、セミナーもある。そういう環境に身を置くというのは、やっぱり日本ではなかなか得難い経験なのではないか。

私自身は最先端の学問ではなくて、いまでも5千年前といった大昔の学問をやっていますが、逆に様々な学問分野の最先端がどうなっていて、今何が問題とされているかを知れたのは、自分の研究を進める上でも、発想力を高めるという点において非常によい経験となりました。

現在はイギリスやエジプトへ毎年資料や発掘調査に行っていて、来月も実は中部大学の授業を一部休講して、エジプトへいくのですが、私にとっては、イギリスと日本とエジプトの三角関係というのは、それぞれ全く異なる環境の中に身を置いて、絶えず頭をリフレッシュしながら教育や研究に取り組めるという意味で非常に有意義な感じがいたします。以上です。

○中山 はい、ありがとうございました。

それでは時間が迫ってきましたので、お二方には、この若手3人からのご意見ご質問に対して、何かコメントをお願いします。5分ずつぐらいで、ご自由に。

○河合 私は大学教育というのは、一度外国へ出て、自分の国、自分の教育を振り返ってみるというような機会がないと、完成しないのではないかとこのぐらいに思っていました。

逆に日本で大学をつくるという計画にからだるとき、実際に広島市立大学という大学をつくるときの委員になりました。そのときに、留学しなくてもいい学校にしようという具合に考えました。

一番最初に考えたのは、日本人が一番国際的に方向を失うのは、日本研究なんです。日本研究を外からの目でやらなければいけない。できれば日本語を使わずにやらなければいけない。

だから、広島市立大学の国際関係学部で目玉の授業、日本政治外交史は、英語でやるという案を出しました。そして大学の公用語は、基本的に日本語と英語、英語は、これは国際語だから外国語に入れれない。教授会も必要とあらば、外国人の教師が多くなれば、日英でやるというような案を出しましたが、結局、うまくいきませんでしたね。

天降りで入ってくる人がいて、英語でやってくれと言ったら、だめだ。だから、外国人をもう一人横に、べつに並行講座をつくるといったようなこともありました。

日本で、外国人に日本研究の講座を担当させたのは、私が知っている限り、ドナルド・キーンが最初だったかな。

私がイギリスへ行って、日本からお呼びがなかったら、オックスフォードで教師になりかけていましたが、そのときにはイギリスの政治をやっていました。そのときに、俺は日本人だ、それにイギリスの政治をやらせるのは大変だろうと言ったら、「いや、そうじゃないんだ。おまえの言うことは、イギリス人じゃないからいちいち面白い」と言いました。

日本人で、日本の政治とかそういうことについて外国人の教師に頼むということは、なかなかないでしょうね。そういうふうになれば、留学する必要がなくなるでしょうね。これが一つの点です。

なぜアメリカに行かなかったかという、一つには、私の大学院の学生生活というのは、日米安保条約改定反対、1960年の盛り上がりだったときで、私は大学院でしたが、学部のように、国会に突っ込むなんていうことは思っていませんでしたが、デモ隊に参加したために、どうもアメリカにはビザが取れないだろうということがありました。

だけどそれ以上に、政治ということになりますと、イギリスの政治思想家というのは、人類の問題を一番深く、一番先駆けてやっていますから、行くならイギリスだと思っていました。

現実には、世界中のたいていの国は、自分が持っている植民地と一緒に共倒れするわけです。いったんは外国を占領する。そうしたら撤退できないから共倒れになってしまいますね。日本がそうでしたし、共産主義のロシアもそうですし、ヒットラーのドイツもそうですね。ところがイギリスだけは、インドが独立させる、あるいは2世紀前、アメリカを独立させたことを、むしろいま誇りを持って振り返っている。そして尊敬されている。いったいこれはどういう訳だということがあります。

安保で負けて、亡命するなら、やはりイギリスだと考えていた時代です。

○中山 はい、ありがとうございます。それではどうぞ。

○長島 二つありまして、これは皆さんが言われたことでもあるのですが、どこへ行ってもたぶんそうだと思いますが、留学した先の学生・教師の本気度が凄いいいことですね。日本の大学では一般的にこれが低いと思われます。本学だけではありません。私は前に一橋大学にもいたのですが、学生は勉強しませんよ。おまえらなんで勉強しないんだと聞いたら、「先生、そんなことをしたら東大になっちゃう」。「おっ」という落ちでしたけれども。

やっぱり本気度、つまり勉強を格闘技として捉えるという考え方が必要でしょう。格闘技というのは、格闘しなければ絶対に身に付かない。やって身に付くとは言えませんが、やらなければ身に付かない。それは問題をどう立ててどう答えるかに取り組むことです。これはやっぱり経験に値するだろうと思います。

もう一つは、現在の世界構造を言語的に考える必要があります。例えば日本では、西洋とアフリカは違うと思っています。先進国と貧乏国。でも私はしょっちゅうウガンダへ行っていますから、そこがいかにもイギリスであるかということが肌でわかる。

国際語としての英語という観点からは日本は世界の蚊帳の外にある。ウガンダ人に言わせると、日本の学生ってなんで英語ができないの、それでどうして大学生になれるの不思議がります。

実は10月の始めに、日本の院生と向こうの院生のシンポジウム、私はコメンテーターをやりました。さすがにその日本代表は英語ができましたけれども。普通、NGO等々で、善意だけでやってきて、現地理解がほとんど不可能な若者を、私はかなりたくさん見てきました。やっぱり語学力ですね。この問題を深く考えることがとても必要だということで締めくくらせていただきます。

○中山 はい、ありがとうございました。

いまのお二人に対して、また何かお三方からあれば。

○伊藤 いま、語学ということが出たのですけれども、私はイギリスに行って、いままでの自分の英語的バックグラウンドが、アメリカ英語であったということに、初めて気付きました。

それまでは英語といえば、アメリカ英語といった教育を受けてきたのですが、実はヨーロッパの大陸のほうの各国でも、また旧イギリス植民地においても、話されているのはブリティッシュイングリッシュなんですよ。

それがイギリスでは本来の英語の発音だと言うことに気付かされ、そういった意味で、自分が今まで置かれてきた日本における英語教育というのか、あるいは日本のカルチャーが、いかにアメリカナイズさ

れているのか、あるいは、外国語を学ぶ日本人の文化に気付いたという感じがします。

○中山 はい、ありがとうございました。

○長島 アメリカとの関係なんですけど、私は学部・大学院を通してアメリカの文化人類学を7年ぐらいいやまして、なんかいかがわしいなと思い始めました。アフリカ研究をやっていると、どうしてもイギリス社会人類学のアフリカ研究を読まざるを得なくなりました。そうすると、こっちは本物感がありました。この米英の違いはフィールドワークの質の違いです。

人類学におけるエスニックジョークを紹介しましょう。イギリス人は本国の食べものがまずいから、外国のどこでも暮らせる。フランス人はワインがないと暮らせない。ドイツ人は理論ができたと言ってフィールドの手前で帰ってしまう。アメリカ人は理論武装過剰で、フィールドで見た現象に持参の理論を押しつけてしまう。といったものです。

もちろん現在、オリエンタリズムとかいろいろなかたちで、植民地時代のライティングのスタイルについては、とやかくアメリカ人は言いますが、内側へ入っていく入り込み方に物足りなさを感じます。これが理論と実践という問題で深く考えさせられていることです。

○中山 はい、ありがとうございました。では、野田さんどうぞ。

○野田 はい、ありがとうございます。前段のお二人の言談といい、いまのコメントといい、まさにわが意を得たりということで、本当にこの時間を共有させていただいたことに感謝いたします。私なりにまとめさせていただければ、先ほど河合先生がおっしゃられた「留学しなくていい」という発言はとても大事なことだと思います。

○河合 してもいいと思う。

○野田 してもいいんですか。しなくて済めば、それに越したことはない、と。

○河合 どちらもできるようにしておくのが、いいと思います。

○野田 そうなんです。まったくそうなんです。NOVA その他、留学産業が怪しいということはひとまず置いておくとして、いまの日本、私たちが置かれている立場を世界的に見た場合、かなりの責任が日本にはあるだろうし、私たち一人ひとりにもあるだろうと。日本は短期間で世界第2位の経済大国になってしまったわけですから。

さらに言わせていただくと、この国際関係学部は日本では何番目かに古い、西日本では最初の国際関係学部なんですね。そこにいる教員や学生がグローバルな視点に立って、いま地球で起きているさまざまな問題と格闘していく、それをしなかったらいったい誰がやるんだという思いを、今回のお話を聞いて非常に強くしました。自分の頭で考えて行動できる人間、地球市民と言ってもいいし、本学の精神にある「あてになる人間」と言うてもいいと思いますが、そのような人間を育て社会に送り出していくことが私たち教員の使命だということ、その思いを新たにしました。私がLSEに行ったように、両先生と中野さんがオックスフォードに行ったように、さらには伊藤さんがサセックスに行ったように、中部大学の国際関係学部に来ればとてもエキサイティングな経験ができる、楽しいと言われるような大学にしていきたいと思っています。私からは以上です。

○中山 いま、うまく野田さんがまとめてくださったので、それに乗ってしまいます。今日は「いま留学を問い直す ―日本人が欧米で「学ぶ」ということ―」という、大きなテーマであったのですが、留学を問い直すだけでなく、大学がどうあるべきかということまで踏み込んでいった、いい議論になりました。皆さんにはいかがでしたでしょうか。

それでは、これで終わりたいと思います。

○司会 どうもありがとうございました。

皆さま、長時間お疲れさまでした。これをもちまして、中部大学国際関係学部シンポジウムを終了いたします。

私ども中部大学国際関係学部では、今後とも多文化理解、国際交流などについて、皆さまと一緒に考えていく機会を持っていきたいと思っております。また次の機会に、皆さまとお会いできることを楽しみにしております。どうも今日はありがとうございました。

(文責：松村 悟)